



RIETI Policy Discussion Paper Series 19-P-036

## 多死社会における産業振興のあり方に関する一試案

藤 和彦  
経済産業研究所



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所

<https://www.rieti.go.jp/jp/>

## 多死社会における産業振興のあり方に関する一試案\*

藤 和彦（経済産業研究所）

## 要 旨

超高齢社会から多死社会に移行しつつある日本では、「終末期ケア」の必要性が高まっているが、「死」をタブー視している社会通念が災いして、市場における価値はいまだに低いままである。

先進国経済における成長を生み出す源泉として、潜在的な需要を引き出す新たなモノやサービスの誕生（プロダクト・イノベーション）の重要性が高まっているが、「ケア」はいわゆる消費社会に残された最大の成長分野である。特に「終末期ケア」は今後の成長産業の柱の一つになるポテンシャルを有していると考えられることから、日本の現状を打破することができるベンチャー企業の振興が喫緊の課題である。

筆者が注目したのは、一般社団法人日本看取り士会の活動である。

来たるべき多死社会に備えて、在宅での「看取り」の質を向上させるために看取り士の養成に努めている柴田久美子会長は、「望ましい死」という概念を提唱するなど「終末期ケア」の分野で新たな価値を創造しつつある。このことは「終末期ケア」全体の活動の価値を高めることにもつながり、ひいては、日本にポジティブな死生観を醸成する一助となると考えられるからである。

柴田氏は「全国ベースで看取り士の活動を展開したい」と抱負を述べているが、そのためには組織力の強化に加えて、サービスの価値のさらなる向上のために学問的知見を積極的に取り込む必要がある。具体的には、「抱いて看取る」ことの効果をより確かなものにするために身体心理学等の専門家と連携するとともに、死生観に関する知見を多分野の専門家の協力を得ながら体系的にまとめていくことである（柴田氏は「看取り学」という学問分野を提唱している）。特に死生観については、多死社会における日本の今後のあり方を決定づけると言っても過言ではないほど重要な問題である。

本稿では、死生観の中でも日本人が潜在的に有しているとされる「生まれ変わり」という観念に着目し、科学的な方法で「過去生の記憶を有する子ども達」のことを世界全体で調査・分析しているヴァージニア大学の取り組みを紹介するとともに、「生まれ変わり」の観念が人々（特に高齢者）の幸福感に寄与することを確認した。

また、日本の思想家の中で唯一「生まれ変わり」の観念を自らの思想の土台に据えた平田篤胤の現代的意義について触れながら、「生まれ変わり」の観念が日本社会の変革のために有効であると主張した。

さらに、多死社会の到来が資本主義において「母性」という特性が重要視されるとの仮説を展開した。

以上の考察を踏まえ、必要となる政策を最後に提示した。

キーワード： 多死社会、看取り、生まれ変わり、高齢者の幸福感、母性

JEL classification: I00, J00, Z10

RIETI ポリシー・ディスカッション・ペーパーは、RIETI の研究に関連して作成され、政策をめぐる議論にタイムリーに貢献することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び（独）経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

\*本稿は、独立行政法人経済産業研究所における研究成果の一部である。

## 多死社会における産業振興のあり方に関する一試案

### ・はじめに

「超高齢社会」と呼ばれて久しい日本だが、次の段階に入りつつある。

2018年の日本の死者数は136万人と、出生数92万人の約1.5倍となった。

2025年には毎年の死者数が150万人を超え、2040年には約170万人に達するとの予測がある。

死者数を年代別に見てみると、その90%が高齢者であり、その比率は30年後には95%にまで上昇すると言われている。日本では「突然の死」よりも「長くて緩慢な死」が圧倒的に多数となる人類史上初の「多死社会」が到来するのである。

日本では8割以上の人々が病院で最期を迎えているが、財政上の制約から病院のベッド数の減少が避けられない。今後自宅などで看取られるケースが増えることになるが、往時の「看取り」の文化は失われたと言わざるを得ない状況にある。

「死」が社会から隠蔽されているため、このような事態となっていることがほとんど認識されていないが、終末期医療や介護関係者の間では「2025年問題」が懸念され始めている。団塊世代がすべて後期高齢者入りする2025年になると、老化に伴うがんや慢性疾患、老衰などで死に直面する人が急増するため、「死にゆく者をどこで誰が看取るのか」が深刻な問題になると予想されているからである。

このように多死社会が到来しつつある日本では介護などの終末期ケアの重要性が高まりつつあるが、戦後の日本では死は忌避すべきタブーであることから、終末期ケアに関する市場での価値はいまだに低いままである。

先進国経済で成長を生み出す源泉は、潜在的需要を引き出す新たなモノやサービスの誕生（プロダクト・イノベーション）であるが、死に対する社会の評価が変われば、終末期ケアは今後の日本の成長産業の柱の一つになるのではないだろうか。

このような問題意識から、本稿では「望ましい死」という概念を掲げ、終末期ケアで新たな価値を創造しつつある「看取り士」の活動に注目し、その発展の可能性と課題について考察する。また、終末期ケアの価値の向上に資する死生観に関する最新の研究や日本古来の思想について紹介するとともに、多死社会の到来により現在の資本主義システムがどのような変容を遂げる可能性があるかについても言及したい。

### 1. 介護は多死社会における基幹産業

2004年をピークに人口減少時代に入った日本。

人口構造の変化は経済構造の需要と供給の両面に大きな影響を与える（注1）。

超高齢社会では社会保障費が増大することから、労働者の可処分所得が低下し個人の消費は冷え込むことになる。労働者は可処分所得の損失を補おうとして労働時間を増加させても、労働者の総数が大幅に減るため生産量が減少することから、経済全体が縮小する可能性が高い。

公共事業などの財政政策は、需要を発生させ雇用が改善するため生産を増大させる効果があるが、既に退職している高齢者には影響を与えにくいいため、労働力人口が減少した経済では財政政策の効果は低くなる。

金融政策は金利を低下させ、投資や消費を刺激することを意図しているが、貯蓄を主な生活資金としている高齢者は金融政策の恩恵を感じることはない。むしろ利子率の低下は利子所得の低下を意味する。金融緩和により資金調達コストが低下しても、企業が高齢化により需要の増加を期待しなければ、設備投資に積極的になることはない。

高齢化が財政・金融政策の有効性を低下させることは、OECDやバブル崩壊後の日本のデータから実証されている。

多死社会の到来により、終末期ケアを含む介護が経済全体の中で大きな割合を占めることは言うまでもない。

医療・介護部門はこれまでも日本における数少ない成長産業の一つであり、就業者が高い比率で増加し続けた。今後もこの部門が最大で成長産業であることには変わりはない。

日本の要介護認定者数は644万人である（2018年現在）。

約180万人の方々が介護の現場を支えてくれているが、2025年には253万人の介護職員が必要とされており、毎年約10万人のペースで増やしていかなければならない。

介護保険制度からの介護給付費は約10兆円（2018年度）であり、2040年に25兆円になると予測されている。周辺産業を含めると2025年時点の市場規模は約100兆円にまで成長すると言われている。

野口悠紀雄氏は「若年者人口の減少によって労働供給が減少することも加味すると、2050年時点の総労働力に占める介護関係従事者数の比率は最小の場合でも20%を超え、最大の場合には25%を超える可能性がある」と指摘した上で、賃金水準が低い介護分野が大きなウェイトを占める経済は「維持することができない異常な構造だ。およそありえないが、そうならざるを得ない」と悲観的な見方をしている（注2）。

（注1）週刊エコノミスト2019年2月26日号、64～65頁

（注2）野口悠紀雄「2045年問題」ダイヤモンド社、2015年、141頁

## 2. 介護産業の本質的な問題とは

介護は「3K仕事」というイメージが定着しているため、ニーズの急増に担い手が追いつかず、2025年に約38万人の介護職員が足りなくなると懸念されている。

介護現場の深刻さは日に日に増しているようである。

2019年9月7日付ビジネスジャーナルは「介護施設、入居者から職員への精神的暴力等が問題化・・・団塊世代の大量入居に戦々恐々」と題する記事を報じている。

介護現場では人手不足のために介護職員の適性を欠いた人が増え、職員のレベルが劣化し、利用者への虐待などが増加しているが、問題はそればかりではない。

最近「介護職員が被害者、利用者が加害者」となるケースも増えているのである。

厚生労働省の調査（平成30年度）によれば、利用者からハラスメントを受けた職員の施設ごとの比率は4～7割、家族などからは1～3割となっている。訪問の場合では精神的暴力の比率が高く、入居施設では身体的暴力と精神的暴力のいずれも高い傾向を示し、セクハラ被害も多かった。これにより仕事を辞めたいと思ったことのある職員の比率は2～4割、けがを負ったり病気になった職員は1～2割に上っている。

団塊世代すべてが後期高齢者入りする2025年以降介護需要が急増することが予想されるが、介護現場では「団塊世代は従来の高齢者と異質なタイプになるだろう。人口の多

い世代なので自己主張が強く、スマホも使えて情報収集力も高く、病院や介護施設にとっては扱いにくい世代だ。職員に対しては現在のようなハラスメントだけではなく論争を仕掛けてくると思う。入所者の会のようなユニオンを結成して入所条件の変更を要求してくるかもしれない」と戦々恐々である。

さらに深刻な問題は介護の現場で「死がタブー」であることである。

多くの介護現場では「老い」は対処すべき課題とみなされ、掲げられた目標をクリアすべきものとされているため、介護という仕事は「技術」としてマニュアル化され、問題解決のための対処法に重点が置かれている。「死がタブー」であることから、「人間はどう生き、逝くのか」という深遠なテーマに向き合い、死に向かって生きている人に対し元気を与え、前向きに死なせてあげるという本来の目的が果たせないでいるのである。

近い将来主権者である国民は「介護保険料を値上げして介護士の待遇を改善して介護士を大勢雇って十分な介護サービスを提供すべき」か、「介護保険料を値上げせずにできる範囲内の介護サービスの提供にとどめるべき」との選択を迫られることになるが、このような状況のままでは後者を採用する可能性が高いのではないだろうか。

### 3. 重要性を一層高めるプロダクト・イノベーション

「経済成長を生み出すために最も重要な役割を果たすのが新しい財やサービスを生み出すプロダクト・イノベーションである（注3）」

このように主張するのは「人口と日本経済」の著者吉川洋氏である。

先進国経済にとっての頭の痛い悩みは「需要の飽和」だが、最も根本的であるにもかかわらず、最も分析が難しく、しかも最も解決が難しい問題である（注4）。

イノベーションとは「経済的な価値を生み出す新しいモノゴト」のことであり（注5）、経済的価値とは社会的な総余剰を増やすことである。社会的余剰を増やすためには便益を増やす（需要曲線を上方にシフトさせる、プロダクト・イノベーション）か、生産性を上げる（供給曲線を押し下げる、プロセス・イノベーション）ことが必要である。プロダクト・イノベーションとプロセス・イノベーションの間にトレード・オフが存在していることが指摘されている（注6）。

人口の下方圧力に負けずに新たな成長を生み出すために必要なのは生産技術上のプロセス・イノベーションではなく、需要面におけるプロダクト・イノベーションである（注7）。

客単価の高いサービスを提供する社会のニーズに応えるプロダクト・イノベーションが求められているが、吉川氏は「既に現実になりつつある超高齢社会において人々が『人間らしく』生きていくためには、今なお膨大なプロダクト・イノベーションを必要としている（注8）」と主張する。

35年後の日本人は現在の2倍という高い購買力を持っている可能性が高く、そうした高い購買力を持つ彼らがいったいどのようなモノやサービスを求めるのだろうか。彼らの潜在的な需要に応えるようなプロダクト・イノベーションを起こすことを日本の企業がなしうるのだろうか（注9）。

シュンペーターは「イノベーションの担い手にとっては、金銭的なリターンもさることながら、何よりも未来に向けた自らのビジョンの実現こそが本質的だ（注10）」と述べたが、ラディカルなイノベーションは生まれた段階ではほとんど評価されることはない。

だが私たちを取り巻く環境の変化の多くは、このようなイノベーションの担い手によって生み出されている。

(注3) 吉川洋「人口と日本経済」中央公論新社、2016年、151頁

(注4) 吉川洋前掲書、157頁

(注5) 清水洋「野生化するイノベーション」新潮社、2019年、36頁

(注6) 清水洋前掲書、95頁

(注7) 吉川洋前掲書、161頁

(注8) 吉川洋前掲書、185頁

(注9) 吉川洋前掲書、187頁

(注10) 吉川洋前掲書、188頁

#### 4. AI時代の到来で高まるケアの価値

「価値創出の源泉が『モノを作り出す能力』から『意味を創出する能力』へシフトしている(注11)」

このように主張するのは「ニュータイプの時代」の著者山口周である。

人類の長年の夢(今日を生きるのに大きな心配がない)が現実のものになり、人類は初めてモノが過剰な時代を経験している。

「科学の力で不便や不満を解消することを意味する文明化が飽和したことは、テクノロジーの水準はもはや顧客が重視する価値軸ではなくなってしまったことを意味する(注12)」と山口氏は主張する。

一方で「人生において何か本質的に重要なものが抜け落ちている」ような感覚が社会で強まっている。「テクノロジーの劇的な発達とは反対に日本が衰退の一途を辿っているように見えるのは『人生の意義とは何か』という最も根本的な課題に向き合っていないのではないか(注13)」との指摘もある。

「人がどのように生きるべきか」はサイエンスの仕事ではない。自らの五感をフルに働かせて社会や未来を全体的に把握しようとする試みの重要性が高まっている。

世の中の要請に対して相対的に希少な能力や資質は高く評価されるが、モノが過剰となる一方で「意味」が希少となった現在、必要なのは「論理と理性」ではなく「直感と感性」である(注14)。

山口氏は「機能価値から感性価値の時代となった。資本主義の内部にある定義に見直し、資本主義がもたらす豊かさを回復させることが重要である(注15)」と主張する。

AI時代の到来で「人間が大量失業する」との懸念が出ている一方、「どうしても良い仕事が増えている」との指摘も出ている。

イギリスの調査会社「ユーガブ」によれば、「自分の仕事が社会に意味のある貢献をしているかどうか」という質問に対して37%の人が「まったくしていない」、「どちらかわからない」が13%、「間違いなく貢献している」と答えた人は50%に過ぎなかったという(注15)。

「働くイギリス人の37%、オランダ人の40%、ベルギー人の30%が自分のやっている仕事はまったく意味がないと感じている」という調査結果もある(注16)。

実際には何もしていない人の方が具体的に役立つことをしている人よりもはるかに給料

が良くなっており、仕事が社会に貢献している割合ともらっている報酬が逆相関になっており（注17）、どうしても良い仕事に就いている人々も本当は何か人の役に立つ仕事をしたいが生活のために仕方なく給料の高い仕事をしているケースが多いという（注18）。

それでは意味がある仕事とはどのようなものだろうか。

多くの識者が異口同音に今後成長するとしている分野はケアである（注19）。

ノーベル経済学者のポール・クルーグマン氏が「仕事が求められている分野の多くはケア、一対一で面と向かって行うパーソナル・ケアサービスだが、AIが取って代わるようなビジョンは今のところない（注20）」と指摘するように、自動化が進むほど、忍耐のある仕事（ケア労働）が必要になってくるだろう。そういう仕事はたとえロボットができるようになっても多くの人々は敬遠する傾向がある（注21）。ケア分野で一番大切なのは「その人に注意を払い愛情を与える」ことだからである。

だがケア労働には正当な報酬が支払われていない。価値の基準として使われる価格は、人間がモノやサービスに対して主観的につける点数（主観的な評価）を表しているとされる（注22）が、私たちはその価格がどのように決まりどのように変動するかはよくわかっていないのである（注23）。

経済の現場で「意思のある者が多く取り、意思のない者は少なく取る傾向が強いのが実情のようである（注24）。

19世紀末のイギリス経済を分析したマルクスは、当時の資本主義的生産の最も先進的な形態である工場で働く人々の労働が「価値」を生み出しているに気づいた（注25）。これをもとにいわゆる労働価値説を展開したが、現在の資本主義は「工場労働」から「非物質的な労働」へとその軸足を大きく移行している。

人間らしいコミュニケーションを重視する労働、すなわち、ケアの提供が労働における主要な要素になっているにもかかわらず、市場はこの変化に適応できていないのではないだろうか。

（注11）山口周「ニュータイプの時代」ダイヤモンド社、2019年、4頁

（注12）山口周前掲書、122頁

（注13）ポール・クルーグマン他「未完の資本主義」PHP研究所、2019年、152頁

（注14）山口周前掲書、152頁

（注15）ポール・クルーグマン他前掲書、79頁

（注16）ポール・クルーグマン他前掲書、158頁

（注17）ポール・クルーグマン他前掲書、77頁

（注18）ポール・クルーグマン他前掲書、84頁

（注19）ポール・クルーグマン他前掲書、172頁

（注20）ポール・クルーグマン他前掲書、23頁

（注21）ポール・クルーグマン他前掲書、91頁

（注22）吉川洋前掲書、149頁

（注23）ポール・クルーグマン他前掲書、104頁

（注24）ポール・クルーグマン他前掲書、118頁

（注25）マルクス・ガブリエル他著「未来への大分岐」集英社、2019年、88頁

## 5. ケアとは何か

「ケア産業は、経済または産業社会そのもののあり方を変えていくようなインパクトを持っている。経済の中で今後最も拡大が予測されている『ケア』という領域は、いわば消費社会の最後に残された、最大の消費分野である（注26）」

このように指摘するのは「ケアを問いなおす」の著者広井良典氏である。

戦後の日本でも、経済の成長に伴い、家族内のケアが外部化・市場化されてきた。

広井氏によれば①モノづくり（自給自足）の一部に始まり、その後②教育・保育③高齢者の経済的扶養（年金）④高齢者の身体的扶養（介護）と進んだが、いよいよ⑤心のケアという最終段階に入りつつある（注27）という。

だがこの20年以上前の「予言」は実現していない。

「我が国のターミナルケアに関する議論は、技術的な話（延命治療のあり方など）が先行しすぎであり、『死』とはそもそも何かというある意味でターミナルケアの本質ともいえる点についての対応が遅れがちだった」からではないだろうか（注28）。

「ケアとは人間にとってどういう意味をもつものなのか」という基本的な問いかけが、日本ではほとんどなされてこなかったのである。

ケアという言葉は一般的には「看護」や「介護」などを指すとされているが、もともとの意味は「配慮」「関心」「気遣い」などと広い。

ケアされたい欲求というのは、「自分という存在を誰かに認めてもらいたい」「自分という存在を肯定され続けてもらいたい」「『自分はケアされている』という絶対的な確信を得たい」という人間の性に基いている。

人は「ケアされている」という感覚があって初めて生への肯定感が強固なものになる。

ケア、特に終末期ケアは、永遠なもの「いま・ここ」にいる私がつながるようになることで、根源的なマイナス性を帯びているように思えたこの世界が反転し、もう一度絶対的なプラスの価値が付与する営みである（注29）。

終末期ケアにおいて重要な意味を持つのは、「魂の帰っていく場所」を確かめ、いつでも死を迎えられる心の準備が可能となることである。

苦しんでいる人たちの人生の同伴者としてなぐさめたイエス・キリストは究極の「ケアラー」だったとされている。エジプトにおけるピラミッドや中世欧州における教会がいくら作られても便益が減少しなかった（注30）のは、人々のケアに対する欲求が際限のないものだったからではないだろうか。

人間の心には何千年も変わっていない宗教的琴線のような部分があると思われるが、問題はこれにどのようにアクセスするかである。

「時代が求めるのは自分一人で完結する男性的な死生観ではない。他者との関係性を前提に、かけがえのない『いのち』を一所懸命に生き、他者の『いのち』との出会いを大切に思うという、いわば女性的な死生観である（注31）」

このように主張するのは「老年哲学のすすめ」の著者大橋健二氏である。

生命という言葉が目に見える身体（からだ）を指すのに対し、「いのち」という言葉は物質的な「生命」とともに目に見えない「魂」を含んでいる。

老年哲学とは、家族・周囲に世話となり迷惑をかけて当然であるという情けなくも弱いおのれの「個」を甘受し、どうすれば世話と迷惑に値する存在になりうるかということに



ついでの方である。高齢者は、覚悟を持って「弱さ」の哲学を学び、「弱い個」を生きる主体として生まれ変わらなければならないというわけである（注32）。

人生が90年、さらには100年になり、長い時間をかけて死について準備することができるようになった現在、終末期の過ごし方に大きな変化をもたらせるため、宗教的琴線に共振できる方法を検討すべきではないだろうか。

（注26） 広井良典「ケアを問いなおす」筑摩書房、1997年、147頁

（注27） 広井良典前掲書、149頁

（注28） 広井良典「死生観を問いなおす」筑摩書房、2001年、11頁

（注29） 広井良典「死生観を問いなおす」、176頁

（注30） 吉川洋前掲書、158頁

（注31） 大橋健二「『老年哲学』のすすめ」花伝社、2019年、64頁

（注32） 大橋健二前掲書、215頁

## 6. ケアの価値を高める死生観

医療関係者はしばしば患者から「私は死んだあと幸せになれますか」と聞かれるという。

家族も苦悩を抱えることが多いが、何かをすれば解決するとか、答えが得られるというレベルではない。

目の前で不安そうにしている人を安心させなければならないが、医療上の処方箋や治療のガイドラインは存在しない。難問中の難問である。

多死社会が到来しつつある日本では、「スピリチュアルペイン」という言葉が広まり始めている。メディアではスピリチュアルペイン（魂の痛み）のことを「生きる意味を失うつらさ」や「死の恐怖」または「自分の無価値感」などと表現されている。

医療関係者からも発言が相次いでいる。

「スピリチュアルペイン」の著者細田亮氏は、スピリチュアルペインを以下の3つに分類する（注33）。

①死への恐怖（死んだらどうなるかわからないがゆえの不安）

②生きている意味を見いだせないつらさ（衰えていく自分を受け入れがたい気持ち、周囲に迷惑をかけていることへの申し訳なさ）

③

思い残し（元気なうちにやっておけばよかった、もうできないという絶望、今からでは取り返しがつかないという人生に対する後悔）

「どのように生きたとしても最後は死んでしまう」「何を達成しようとどれほど努力しよう、結局死が私たちに無に帰してしまい、何の遺りも残さない」という無慈悲な構造に私たちは耐えられない。

認知症診療の第一人者である精神科医の長谷川和夫氏が自ら認知症になった後に「認知症になり死の不安や恐怖が和らげられている。認知症は神様が僕のために用意してくれたのかもしれない」と語っていることは示唆的である（注34）。

医療や介護の現場からは「死生観や死後の世界をどう考えるかによってペインの内容や強さも変わってくるものであり、周囲のかかわり方や寄り添い方も変わってくるのではない」「死後の世界が幸福感に満ちていると思っていれば死んでも幸せになれる。楽になるから怖くないという感情が湧いてくる」との声が聞こえてくる（注35）。

広井氏は「現在迎えつつある高齢化社会は新たな世界観やコスモロジーというべきものを再構築していく時代に違いない（注36）」と主張する。

戦後日本では、死を賛美した戦前のトラウマがあり、高度成長期を中心に圧倒的に唯物論的な層（死＝無という理解、その典型が団塊世代）が強くなったが、これまで死といったテーマを忌避してきた団塊世代前後の層も自らの老いや死に直面しつつある。

「看取り」が社会の中で日常的な現象となりつつあり、「死」は「生」よりも存在感を高めつつあるが、看取りや死生観についての社会のコンセンサスがなくなっていることから、私たち1人1人がそれぞれのやり方で向き合っていかなければならない状況になっている。

死生観への関心が自ずと高まっており、こうしたテーマが世代の違いを超えた共通の関心事となる可能性がある。

戦後で初めて死生観についての価値が高まる時代になりつつあるのではないだろうか。

（注33）細田亮「スピリチュアルペイン」幻冬舎、2019年、65～66頁

（注34）2019年9月26日付朝日新聞

（注35）細田亮前掲書、104頁

（注36）広井良典「ケアを問いなおす」232頁

## 7. 「看取り士」という仕事

2012年6月、岡山県岡山市に「一般社団法人日本看取り会」というユニークな団体が設立された。団体の理念は「すべての人が愛されていると感じて旅立てる社会づくり」である。来たるべき多死社会に備えて看取りの文化の復活させるために、「看取り士」を養成することが活動の主目的である。

会長の柴田久美子氏が、介護の現場仕事に矛盾を感じて島根県の知夫里島で看取りの活動を始めたのは1998年である。柴田氏が看取り士と名乗るようになったのは8年前である。250人以上の看取りを行った柴田氏の体験が元になって看取り士は誕生した。

2019年11月現在、全国で800人以上の看取り士が誕生している。看取り士をサポートし家族の負担を減らすためのエンゼルチーム（ボランティア）の支部が全国で850以上誕生している（1支部当たり10名体制が基本）。

看取り士の役割を詳しく見てみよう。

看取り士の依頼は、末期がんなどで余命宣告を受けた在宅死希望者やその家族からのものがほとんどである。入院中の患者から依頼を受けたとき、在宅介護のためのケアマネジャーやかかりつけの医師、薬剤師などを探るのが看取り士の役目である。

看取りの現場での仕事は①寄り添い②看取り時の呼吸合わせ③看取りの作法を家族に伝授④臨終後のバトンリレーを行うことである。

看取り士の資格者の6割は看護師、2割は介護士である。女性が9割を占める。

エンゼルチームは、介護中の家族などが食事や入浴、買い物に出かけられるよう終末期の人を24時間体制で見守る（3時間で交代、1カ月を期限、本人が回復すればチームは解消）ことだが、その体験者から「幸せと満足をいただいた、一対一の関係、私自身の存在をこんなに認められたことがありがたい」という感想が寄せられている。

看取り士の使命は、生前から逝去数時間後（納棺前）の人の顔や背中などを家族が触っ

たり抱きしめることで残された時間を温かくて幸せなものにすることである。

幸せに看取るためのポイントは次の4点である。

①肌の触れあいを持つ

温もりで相手に安心感を与えることを目的としている。介護の現場では触れるケアが圧倒的に不足している、

②傾聴、反復、沈黙を繰り返す

言葉に出来ない不安や恐怖心を共有することが目的である。

③「大丈夫」と声をかける

④呼吸を合わせる

自分の呼吸のリズムが他人に共有されると相手に自身の存在が受け入れられているという自己肯定感が生まれるからである。40～50分呼吸を合わせていると逝く人と呼吸が一つになる瞬間が訪れるという。

看取り士を活用するメリットについて、柴田氏は①グリーフケアを必要としない②ポジティブな死生観を持てることを強調している。

グリーフケアとは、死別による喪失からの回復を支援することである。死別による喪失感に陥ると立ち直りにしばしば時間がかかるが、思い残すことなく抱きしめることで逝く人の「魂」が遺された家族の中に生きるという温かい感覚が生まれると、深刻な喪失感に陥ることはないのだという。

このことはポジティブな死生観の醸成にもつながるようだ。逝く人の体のぬくもりを感じることで家族は「いのちのバトン」を受け取る体験をし、逝く人にとっても家族にとっても言葉にできないほどの大きな喜びと感動が与えられるからである。

柴田氏はこのような現場での体験をもとに、ポジティブな死生観を伝える「看取り学」講座など看取りに関する啓発活動も実施している。看取り学とは最期を看取ることだけを学ぶのではなく死生観そのものを確立して生きるための考え方である。

## 8. 「看取り」は日本の伝統文化

在宅での「看取り」が日本で始まったのは江戸時代からである。

戦乱の世が終わり「天下太平」になると、近親者の死が遠い戦場や路上ではなく身近な場所で起こるようになったからである（注37）。

庶民が家族を形成することが一般化したことともあいまって、江戸時代の人々の多くは自分が生活する家屋で死ぬようになったのである。「歳をとって病気になり、やがて病床で臨終を迎える」という一連のサイクルを家人として付き合うことが常態化したことで「看取り」の文化が生まれたのである。

戦前の日本では、自分の祖父母を介護し見送って初めて「一人前」とすることを習わしとする地方があったという。親が必死に働いているから、子供の世話は祖父母がしたのである。自分にお粥を食べさせてくれ、おしめを取り換えてくれたのは祖父母に対して、今度は自分がおむつを取り替えお粥を食べさせ、さっきまで生きていた祖父母が息を引き取って二度としゃべってくれないという体験をして初めて「成人した」という文化がかつての日本にはあったのである（注38）。

戦前いや敗戦直後まで全世界の中で日本人が一番死を恐れない民族だったが、1950

年あたりから1970年あたりまでの20年間に、世界で最も死を恐れる民族の一つに変わってしまったようである（注39）。いつのまにか死を直視しなくなった日本人が、知っていたはずの死に関する情報や知識を忘れてしまったからである。死がわからなくなり、いたずらに怖がっている状況が続いている。

人口増大を前提とし、足りないものや欲しいものがたくさんあり、それを得るために切磋琢磨した結果、現在の日本はかつてなかったほど気楽に快樂的な生を現実化している。

成熟社会となって久しい日本だが、最後に残されたのは死と死後の意味の問題である。

生の快適さと快樂をいくら追い求めても、最後に待ち構えている「死」の問題には何の解決にもならない。「幸せの定義」が社会で統一されることなく個人的なものになっており、「不満はないが不安は消えない」状態が続いている。

戦後の経済成長の恩恵を一番受けているはずの定年退職者たちが、生の孤独感や所在なさに悩まされているのはそのせいではないだろうか。

柴田氏は「中高年で元気な人たちは死の問題から逃げているが、看取りの体験は特に自己否定の感情が強い男性に大きな変化をもたらし、人生の優先順位が変わる」と指摘する。

かつて死の瞬間は周囲の者達と共有される神聖な体験だった。衰弱していく身体とそこから離れていく靈魂、その靈魂はどのようなものかという想像力の中で人間の死というものの厳粛さとリアリティがあった。

2019年6月、50歳代の日本人女性がスイスで「安楽死」を遂げた。

「安楽死を遂げた日本人」の著者宮下洋一氏は本事案を間接的に仲介したとされているが、肯定的な評価を下していないようである。

宮下氏の持論は「たとえもがき苦しむ姿を見せようとも人間は最愛の人の側で死ねればそれでいいのではないか。安楽死が幸せな逝き方かどうかは、患者と残される人たちの家族関係に尽きる。家族が安楽死に理解を示せないのであれば、たとえ本人が理想の死を遂げて結果としてそれが『良き死』だったと言えない」である（注40）。

本事案は遺された家族に少なからず「心の傷」を残しており、「望ましい死」とは言えないからだろう。

（注37）深谷克己「死者のはたらきと江戸時代」吉川弘文館、2013年、14頁

（注38）カール・ベッカー「日本的な『看取り』：その準備、受容、意味」静岡県医師会 報2013年2月号

（注39）山折哲雄他「日本人と『死の準備』」角川書店、2009年、158頁

（注40）宮下洋一「安楽死を遂げた日本人」小学館、2019年、346頁

## 9. 望ましい死

柴田氏は看取りの歳に「死なないで」ではなく「もういいよ。安心して旅立ってね」と言ってほしいと望んでいる。さらに自らの体験を通して「望ましい死」という概念を提唱している。

看取り士の活動を長年取材しているジャーナリストの荒川龍氏は興味深い事例（88歳の祖父の死に「おめでとう」といった孫）を紹介している（注41）。

「祖父は多くの人に触れてもらい、笑顔で声をかけてもらえて幸せだったと思います。『死は悲しくて怖いもの』というイメージがありましたけど、悲しいのはそうだけど、そ

れだけじゃない。人生をまっとうしたという点では『お疲れ様』だし、人生の卒業式なら『おめでとう』だし。」

このことでわかることは子どもにとっての死を「冷たくて怖いもの」にするのも「温かくて幸せなもの」にするのもすべて大人次第であるということである。

競争好きの米国人の間で「誰が最も望ましい死（最高の死）を迎えることができるか」を競いあうようになっているようである（注42）。

望ましい死とは、痛みを緩和する処置を受けていても意識は明瞭で家族に囲まれ皆でお気に入りの歌を歌い何の不安もなく自宅で人生の最後の瞬間を迎えることである。

米国では終末期のがんやH I V感染症患者や家族、医療関係者など100名に対して面接調査を行った結果、「望ましい死」の概念として以下の6項目が抽出された（注43）。

その要件とは①痛みや症状が緩和されていること②自分の意思ですべての選択ができること③自分の死期をあらかじめ知った上で死に対する準備ができること④自分の人生が完成したと思えること⑤他者の役に立つこと⑥最後まで人として尊重されることである。

長い間タブー視されてきた問題について考え議論するようになったのは悪いことではないが、望ましい死に向けて最善を尽くしても実際には多くの人々がそれを実現できないことから、残された家族に罪悪感を与えるなどの問題点も指摘されている。

人類全体の平均寿命が現在72歳まで延伸している（1800年の時は29歳）。

20世紀に病気、貧困、戦争という三大苦に対する一定の解決が図られたことから、人類全体の関心事項が「命の長さ」から「命の質をいかにして豊かなものにできるのか」にシフトしつつある。

残念ながら人生満足度が高い日本人の割合は極めて低い（12%）。「経済や寿命が大きく改善したのに日本ではなぜ人生満足度が進歩しなかったのか」と世界で注目を集めている（注44）。

欧米では1980年代から「QOD（死の質）」という概念が使われ始めている。

亡くなる間際だけではなくその前から思い残しがないよう死の準備をしていくことがQODの向上に重要である。その意味で「Dとは「死ぬ瞬間」のD e a t hではなく、「死にゆく」=D y i n gと解釈した方が適切である（注45）。

（注41）2018年9月16日付東洋経済オンライン

（注42）2019年8月4日付F o r b e s

（注43）加藤直哉「人は死んだらどうなるのか」三和書房、2019年、213頁

（注44）石川善樹「VOICE2019年10月号」、197頁

（注45）細谷亮前掲書、156頁

## 10. 看取り士の活動の現状

多死社会の到来により、必要とされる看取り士という新たな仕事。

看取り士の資格を取得するために3段階の養成講座に参加し、看取りにおける礼儀作法や自宅に旅立つためのマニュアルなどを学ばなければならない。

受講に必要な期間は2日間、費用は12.8万円である。

筆者が注目するのは、看取り士の報酬が1時間当たり8000円と高額なことである。

看取り士のサービスは医療保険の適用はないものの、生命保険のリビング・ニーズ特約

が利用できる。リビング・ニーズ特約とは、原因を問わず被保険者が余命半年以内であると判断された場合、将来受け取る保険金額の範囲内（3000万円が上限）でお金を受け取れる特約のことだが、ほとんどの保険にはこの特約が付いている。

看取り士の有資格者は800人を超えているものの、実際に看取りの活動を実施しようとしているのは1割に過ぎない。その大半の人たちの取得の動機は「両親の看取りに備えて」などだからである。

柴田氏は「2025年までに看取り士を3万人にまで拡大し、全国で誰もが『望ましい死』を実現できるような社会にしたい」という目標を掲げているが、これを実現するためにどのような課題があるのだろうか。

柴田氏は看取り士の活動を広めていくために、映画「みとりし」を製作（費用は約7000万円）、東京、名古屋、大阪などで上映が行われている。

主演を演じた榎木孝明氏が初めて柴田氏と出会ったのは2007年8月、島根県知夫利島の「なごみの里」だった。「なごみの里」を訪問したことで榎木氏は、「人は死で終わるのではなく命は続く」と確信したという（榎木氏は2019年内に看取り士の資格を取得する予定であるとのこと）。

柴田氏のテレビ出演も相次いでいる。2019年1月8日午後7時からのTBSの番組で義父と実母の2人の介護と育児で壮絶な日々を送っている元CMクイーンの前に、介護家庭の悩み相談の専門家として登場した柴田氏の「神対応」が大きな反響を呼んだ。看取り士の世間での認知度は着実に高まっているが、看取り士の実際のサービス活動は思うように伸びていない。

このような現状を打破するため、柴田氏が看取り士サービスの初期市場と見込んでいるのは「おひとり様の最期」である。

日本における高齢単身世帯（おひとり様）は約600万に上っている（2015年時点、そのうち約400万世帯が高齢女性）。

高齢単身世帯が急増しているのにもかかわらず、「おひとり様」が何か不安を感じた時に気軽に相談できる窓口または相手が地域社会で決定的に不足している（注46）。

高齢単身世帯の急増は地域での「孤独死」の急増につながることから、地方自治体も対策を講じ始めている。

神奈川県横須賀市は2016年から死後の葬儀やお墓に不安を抱える「おひとり様」を支援するエンディングプラン・サポート事業を開始した。具体的な内容は「身寄りがなく経済的に困窮しているおひとり様」の葬儀と納骨に関する「生前契約」を支援することだが、この取り組みは神奈川県内で広がりを見せている。

神奈川県大和市も2016年から同事業を開始した。同市健康福祉総務課によれば、150件以上の相談があったが、契約に至ったのは1件だけだった。一方「収入はあるが独り身で葬儀が不安」など切実な声が寄せられている。死後への不安や関心は幅広いことを痛感した大和市は、2018年5月に全国で初めて支援対象の制限を外すとともに、業者や専門機関と連携を深めるなど相談体制を拡大する方針を発表した（注47）。

この動きは神奈川県から始まり、東京都、千葉県、愛知県、兵庫県などに広がりを見せている。看取り士のサービスが加われば、その内容は充実したものになるだろう。

柴田氏はさらに「高齢者見守りサービス」を開始した総合警備保障会社との連携を模索

している。

(注46) 山崎宏「福祉で稼ぐ」WAVE出版、2017年、53頁

(注47) 2018年5月29日付朝日新聞

## 11. ティール組織

看取り士のサービスを全国的に展開するためには、組織力の強化が急務である。

現在看取り士に関する要望は日本看取り士会本部（岡山県岡山市）で一括して対応することになっているが、今後要望件数が増加した場合には全国に11カ所設置されている看取りステーションで対応することが必要となろう（2019年5月に研修所に加えステーションが設置されたが、マネジメント能力が高いとは言えない状況にある）。

柴田氏は「2020年に看取り士の派遣部門を株式会社化することを検討している」と述べているが、ケア事業に適した組織形態が望ましい。

世界では「ティール組織」という新しい会社組織が注目を集めている。

ティールとは「青緑色」を指す英単語でありそれ自体に意味はないが、発案者であるフレデリック・ラルー氏が最新型の組織モデルを「ティール色」で表現したので、こう呼ばれている。ティール組織の特徴は①個々に意思決定権がある②社員の意思を重視してビジョンや事業などを変化させる③組織の存在目的に合わせ進化し続けるなどである。

世界のティール組織の中で最も成功を納めているとされているオランダのビュートゾルフという会社がある（注48）。

ビュートゾルフという会社名は、BUURT（近隣）とZORG（ケア）というオランダ語を足したであり、地域密着型の訪問看護ケアを行うことをミッションとしている。

2005年に設立されたビュートゾルフは急成長を遂げ、オランダで最大の訪問看護事業者となったが、その特徴は①医療・介護が統合された切れ目のないケア②本人と地域の力を引き出す支援である。地域包括ケアシステムの理想的なあり方と賞賛されている。

ビュートゾルフの経営者は自身も看護師だったヨス・デ・ブロック氏である。

注目すべきは1万人の看護師に対して本部に数十人のスタッフしか存在しないことである。すべてのマネージャー職を廃止し、11～12人の看護師によって組織されたセルフ・ディレクション型のチームに置き換えた。

キーワードはセルフマネジメント（自主経営）である。スタッフ、マネージャーといった階層構造を持たず、現場で意思決定がなされている。「ケア方針を決める」のも「メンバーを採用する」のも「チームを解散する」のもすべて現場の看護師が決定している。

徹底したセルフマネジメントを可能にしているのは、組織が目指すべき目標や品質・生産性・労務といったマネジメントのポイントなどがすべて最新のIoTで見える化されていることにある。

所属するどの看護師がどんな分野に詳しいかが社内のイントラネットで簡単に探せることができるとともに、採用面接のやり方など業務上必要になる研修は動画コンテンツ化しイントラネットにアップされている。

チーム内の問題解決の方法にeラーニングが採用され、社内SNSでチーム横断のコミュニケーションや経営陣からのメッセージを一人一人が読める環境が整っている。

気になるのは個々の看護師の評価や評価・処遇の決定方法だが、オランダでは看護師の

給与は資格のレベルと経験年数で一律であることから、この問題に悩まされることはない。一方、日本の現場では年々本部への報告・調整・連絡といった作業に時間をとられ本来のケアの仕事が満足にできなくなり、その結果生産性が低下するという悪循環に陥っているケースが多いと言われている。

良い臨終を迎えるためのサポートする看取り士がその使命を全うできるようにするためには、ティール組織が大いに参考になるだろう。

現在無償で行われているエンゼルチームの処遇改善も必要である。

「みらいのお金」の著者松田学氏が提唱している「ポイントを貯めたボランティアが、将来今度は自分や自分の家族の介護などを手伝ってくれたボランティアにそのポイントを渡す」ことが出来るという「ボンド（絆）ボンド」構想が参考になる。

看取り士の活動を全国展開していくためには、葬儀業界との連携が有効である。

全日本葬祭業協同組合連合会によれば、業界の年間売り上げは約1.6兆円、常用雇用者数は約5万人である。その内訳は①冠婚葬祭互助会が40%②葬祭専門事業者30%③JA（農協）15%④その他15%である。中小零細業者が多いのも特徴である。

多死社会の到来で葬儀件数は増えているが、一件当たりの売り上げが減少し苦境に陥りつつある葬儀業界だが、(株)アーバンフューネス（中川貴之社長）のように、「その人らしく送り出したい」という思いから、葬儀のあり方を根本的に見直し新しい価値を生み出そうと取り組んでいるベンチャー企業も登場している。

QODの概念が定着している英国では火葬場や教会、墓地などで葬儀を行うよりも、故人の個性豊かな人生を表れるような葬儀が人気を集めている（注50）。

日本でも同様な傾向が出てきたことは感慨深い。

「生前から顧客と接点を持てる」看取り士の資格を積極的に取得することは、日本の葬送文化の活性化にも資するのではないだろうか。

（注48）フローレンス「オランダ視察レポート5：ビュートゾルフ」

（注49）松田学「いま知っておきたい『みらいのお金』の話」アスコム、2019年、251頁

（注50）2019年9月8日付英テレグラフ

## 12. 皮膚は「心」を持っている

看取り士の養成法についても改善の余地がある。

看取り士の「売り」は①抱きしめて看取ることと②ポジティブな死生観を伝えることだが、これらは柴田氏の長年の経験に基づくものであり、科学的な根拠や客観的なエビデンスに裏打ちされたものではない。看取り士というイメージも、柴田氏の個人的なカリスマに依存している傾向が強い。

看取りというサービスの価値を高めていくためには①触覚や呼吸などの身体動作や②死生観に関する学問的知見を取り込む必要がある。

まず最初に「抱いて看取る」際のタッチング（触覚）について見てみよう。

生殖細胞が成長し始めると「内胚葉」「中胚葉」「外胚葉」に分かれるが、外胚葉から皮膚と脳が分かれていくことから、山口創桜美林大学教授は「皮膚は心を持っている」と主張する（注51）。



触覚は人生早期から発達しているが、生涯にわたってあまり衰えない感覚である。特に手や唇に関しては加齢による変化の影響が少ないことが知られている（注52）。

実験によれば、視覚だけの出会いでは「冷たい」、聴覚だけの出会いでは「距離がある」という印象を持つのに対し、触覚だけの出会いでは「信頼できる、温かい」という印象を持つことがわかっている（注53）。

同情や感謝といった向社会的な感情は表情や声では相手に伝わりにくいが、相手をゆっくりと触れることで初めて伝わる。人はタッチングから相手の意図を読み取ろうという行動を通して、幸福や快といったポジティブな感情を抱くのである。人は愛情を伝えるために相手を撫で、同情を伝えるために軽く叩き、感謝を伝えるために握手するのは理由があるというわけである。

タッチングにもコツがある。①手のひら全体を使いやや圧をかけて触れる②離すときは斜めに手を引き上げるのがポイントである（注54）。

触れる前にあらかじめ親密な信頼関係を確立しておくことも欠かせない。触れられて一番抵抗が少ない部位は肩である（注55）。

皮膚を通して相手を感じるとそれに自分の身体が反応してホルモンや自律神経などの変化が起こる。するとそれに相手の身体が反応する、こうして互いの身体が共振することでコミュニケーションが深まっていく（注56）。

じっくりと相手に触れてもらうことで自尊感情が高まる。相手が自分を尊重してくれながら自分のために献身的に尽くしてくれるといった感覚が自分はそのような価値のある人間なのだという自信にも似た感覚を呼び覚ましてくれるからだ（注57）。

親密な人から触れられると脅威が軽くなり、「死ぬことへの不安」が低下する（注58）。

日本人の触覚は極めて繊細である（注59）。スキンシップは費用対効果が良いにもかかわらず、介護や医療現場ではスキンシップを主体としたケアをしている施設はまだ不十分である（注60）。

愛する人が死の淵をさまよう際に世話をする人は、無力感を抱きがちであり「自分は何もしてあげられない」と思い込んでいることが多いが、山口氏は「誰でも簡単にできるマッサージなどを取り入れてみると、世話をする人はとてもやりがいを感じて、愛する人の死後も『自分にできることはやれたんだ』という思いを持つことができ、死後の悲しみも軽くすることができる（注61）」と主張する。

タッチは相手の存在を認め、支え、受け入れるといったように全人的苦痛に対して多面的なケアの可能性を提供してくれるものである。問題そのものは解決できなくても、相手が病苦とともに生きるのを支え、寄り添い、励ます力を持っているのである（注62）。

「人生の終焉には周囲の人たちにタッチされながら命の灯を消すことができたらなんと幸せな人生だろうと思う（注63）」と山口氏は主張する。

多死社会では、強い幸福感（H a p i n e s s）ではなく、日常でのほのぼのとした「満たされ感」（W e l l - b e i n g）がこれまで以上に大事になるのではないだろうか。

（注51）山口創「皮膚は『心』を持っていた！」青春出版社、2017年、18頁

（注52）山口創前掲書、77頁

（注53）山口創「皮膚感覚から生まれる幸福」春秋社、2018年、114頁

（注54）山口創「皮膚は『心』を持っていた！」、92～95頁

- (注55) 山口創「皮膚は『心』を持っていた!」、99頁  
(注56) 山口創「人は皮膚から癒やされる」草思社、2016年、177頁  
(注57) 山口創「人は皮膚から癒やされる」、140頁  
(注58) 山口創「人は皮膚から癒やされる」、40頁  
(注59) 山口創「皮膚感覚から生まれる幸福」、185頁  
(注60) 山口創「人は皮膚から癒やされる」、122頁  
(注61) 山口創「皮膚感覚から生まれる幸福」、132頁  
(注62) 山口創「皮膚感覚から生まれる幸福」、144頁  
(注63) 山口創「皮膚感覚から生まれる幸福」、2頁

### 13. 日本人の死生観

次に「死生観」を巡る現状について見ていきたい。

現在の日本では公の場で死生観が語られることはほとんどないが、今日ほど死が切迫してきている時代はない。にもかかわらず死や死後を意味づける「物語」は確かな形では存在しないことから、個人がひとりで死と向き合わざるを得ない状況となっている。死はもちろんのこと、死について考えても何の解答も得られないことが、恐怖を募らせる要因になっている。

「死生観を問いなおす」の著者広井良典氏は「日本人の伝統的な死生観には、死んだ人の魂が何らかのかたちで存在し続けるという輪廻転生的な発想があり、しかも輪廻転生それ自体が否定的にはとらえられているわけではない(注64)」と指摘する。

「死と生」の著者佐伯啓思氏も「『輪廻転生』などの観念がわれわれの深層心理の内いまだ保持されている(注65)」と指摘する。

日本にはかつて様々な死生観があった。そのせいか私たちがぼんやりと思い浮かべる死のイメージは極めてあいまいで、統一のとれた世界観をなしていないが、そのベースには「生まれ変わり(輪廻転生)」という観念があったようである。

縄文時代には既になんらかの「生まれ変わり」の観念があったようである。縄文時代の遺跡の住居跡を調べると、入り口に甕が埋められていることがある。この甕は逆さにされ、底には小さな穴が開けられており、乳幼児や死産児の遺体が納められていた。死産児の遺骨を玄関の床下や女性用トイレの脇などに埋める風習がごく最近まで日本で見られていたが、「死んだ子供が少しでも早く生まれ変わってくることを願って、遺骸を女性が頻繁にまたぐところに埋めた」とされている(注66)

遺体を埋める前に墓の中に魔除けと「生まれ変わり」を促すとされるベンガラ(酸化鉄)という赤い粉をまいたりしていた事例もある(注67)。

伝来した仏教の中で浄土系が人気を博したのは、「生まれ変わり(往相回向・還相回向)」を教義にあったとの指摘がある。

死んでいく者の苦しみをいくら慰めようとしても、「死が消滅である」という恐怖を取り去ることはできない。「死が消滅ではなく次の世界への橋だとしたならば・・・」それを願わぬ人はいなかっただろう。

「往生要集」の例でわかるように平安時代から日本では精神面のホスピスは行われていたのである(注68)。

日本では山岳信仰が盛んであったが、山岳信仰にも一種の「生まれ変わり」の世界観があった。「神聖な山岳に存在する霊魂が神の導きによって女性の胎内に宿ってこの世に生まれ、神に守られて成長し死後再び聖なる山に帰る」と考えられていた（注69）。

民俗学の祖である柳田國男も「日本人の信仰の一番主な点は私は『生まれ変わり』ということではないか（注70）」と考えていた。

小説の世界でも「人間失格（太宰治著）」の主人公が、恐ろしく孤独な現実の生を去って本当に帰りたい先は、どこまでも自分を優しく包み込み、安心して身を委ねることのできる魂にとっての「うち」であり、母親の胎内にある胞衣（えな）のような生命の故郷だった（注71）。

死生学に詳しい伊藤由希子氏が「一度は離れた母胎にもどり、ふたたび母に抱かれながら、安心してたゆたう（注72）」と述べているように、そのようなイメージを古代から現代に至るまで多くの日本人が抱いていたのである。

このように日本人はかつて「死んでも終わらない物語」を信じていた。

現在の私たちも死後の世界などについて問われたら「間違いなくある」とは答えられないが、杓子定規な唯物論的死生観を固執する人以外は完全に否定することはないだろう

心のどこかで「『生まれ変わり』はもしかしたらあるのかもしれないな」と漠然とした思いを持っている日本人は意外と多いのではないだろうか。

（注64） 広井良典「死生観を問いなおす」筑摩書房、2001年、151頁

（注65） 佐伯啓思「死と生」新潮社、2018年、145頁

（注66） 竹倉史人「輪廻転生」講談社、2015年、173～174頁

（注67） 築瀬均「魂のゆくえ」秋田魁新報社、2017年、207頁

（注68） 遠藤周作「死について考える」光文社、1996年、48頁

（注69） 築瀬均前掲書、92頁

（注70） 立川昭二「日本人の死生観」筑摩書房、2018年、144頁

（注71） 谷川ゆに「『あの世』と『この世』のあいだ」新潮社、2018年、29頁

（注72） 大城道則他「死者はどこへいくのか」河出書房新社、2017年、217頁

#### 14. 戦後抑圧された「生まれ変わり」の観念

日本人が有していた「生まれ変わり」の観念は、第二次大戦中に「大和魂」という形で歪曲されたことから、戦後はその反動のためか、公に語られなくなってしまった。

だが「生まれ変わり」の観念が根絶やしになったわけではない。

児童文学作家の松谷みや子死も民間伝承の中にある「生まれ変わり」の話を約260例集め、現代民話考「あの世へ行った話」を1986年に出版している。

日本では古くから顔立ちや仕草・性格などが似ていることや身体と同じ場所にホクロや痣があることが「ある人の生まれ変わり」の根拠になると考えられてきたが、「故人の遺体の手のひらや足の裏に名前やお経を墨で書き、その後よく似た母斑を持った赤ん坊が近縁で生まれてきた」という逸話が戦後の日本でも数多く残っている（注73）。

小説のジャンルでは遠藤周作の小説「深い河（1993年）」が有名だが、佐藤正午作「月の満ち欠け」が2017年に直木賞を受賞している。

漫画の分野では手塚治虫作「火の鳥」が、日本人ならではの独特の死生観を実に軽妙に

わかりやすく描いている。

映画の世界では2012年4月に公開された「トテチータ・チキチータ」が「生まれ変わり」をテーマにしている。「なんの繋がりもなかったはずの孤独な登場人物たちが、実は生まれ変わる前に家族（父・母・兄・妹）だったらしいということがわかる。前世的な関係性が、彼らを温かく包み込み次第に結び合っていく。最後は離れ離れになるのだがこの出来事によって新たな力がそれぞれに与えられていく」というストーリーである。

このように古代の神話から現代のエンターテインメントに至るまで「生まれ変わり」は人類が紡ぐ物語の鉄板ネタである。

精神分析学の祖であるジークムント・フロイトは、「心的な表象を抑圧したり排除したりしても、それは消えてなくなったりせず、別のところに出てきてしまう」現象のことを「抑圧されたものの回帰」と名付けたが、世の中に登場する「新しいもの」は無から生じるのではなく、既に存在しているが抑圧されているものが時代の変化に応じて回帰して行くことが多いのではないだろうか。

「死の不安」という問題に真摯に向き合うのが本来の宗教の役割であるが、宗教は習俗と結びつくことなしには成り立たない存在でもある。信仰というのは頭で理解するものではなく、ある種の身体的な実感に根差すリアリティのあるものでなければならないからである（注74）。

「祖霊」という観念がリアリティを失い、かつてのように「ご先祖様になって子孫を見守る」ということで安心感を得る日本人は少なくなっているが、「死を形骸化した宗教儀礼に預けたままにして死についての思索を欠いたまま」という現状をいつまで続けられるのだろうか。人類が太初から行ってきた自らの存在を聖化する（大いなるものとの紐帯を創造する）営みを中止することはありえない。

新たな神話が要請される時代が到来していると言えよう。

マックス・ウェーバーは「脱呪術化（救いの手段としての呪術を排除すること）」を唱えたが、脱呪術化は「脱宗教化」という意味ではない。

ウェーバーは宗教自体は「人生に究極の意味を与えるもの」として積極的な価値を与えていたが、「従来からの儀礼に盲従するのではなく魂の救済の方法を徹底的に合理化すべきである」と主張した（注75）のである。

日本人の死生観を再構築するためには、かつて信じてきた「生まれ変わり」の観念を徹底的に検証してみるのが有益である。

ここで「生まれ変わり」の観念についての学問的知見を見てみよう。

（注73）竹倉史人前掲書、39頁

（注74）谷川ゆに前掲書、158頁

（注75）橋本努「解説ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』講談社、2019年、152頁

## 15. 「生まれ変わり」とは何か

「1人の人間が死亡した後にその人格の一部が生き残り、その後長短さまざまな休止期間を経て新しい肉体と結合する」（注76）

これが一般的な「生まれ変わり」の観念（輪廻転生）の定義である。

「生まれ変わり」の観念の起源は古い。インドでは少なくとも過去4000年にわたって宗教的、哲学的発達の最大の源泉の一つになってきた。

人類の精神史の中で輪廻や復活といった「生まれ変わり」の観念が繰り返し生じており、客観的な事実か単なる妄想なのかどうかは別にして、繰り返し出現してくるだけの心理的な必然性があったことだけは間違いない。

ドイツ、英国、米国、豪州の4カ国で発足した世界最大規模の社会調査機関である「国際社会調査プログラム(ISSP)」は1984年から世界規模の調査を実施しているが、2008年に「あなたは輪廻転生を信じますか?」という新たな質問項目を追加した。

質問を追加した背景には、1960年代以降欧米などのキリスト教圏においても「生まれ変わり」という観念が流布するようになってきたという背景がある(注77)。

米国精神医学会が1994年にこれまで「病理現象」とみなしていた宗教的体験やスピリチュアルな関心を初めて「文化的事項」とみなすようになったことも影響しているとされている。「生まれ変わり」を始めとするスピリチュアルな観念が、レジリエンス(人生の困難を乗り越える力)を高める力を秘めていることが証明されたからである(注78)。

ISSPには世界中から40を超える国や地域が加わり、日本も1992年から参加した(NHK放送文化研究所が調査を担当)。

2006年から2008年にかけてギャラップ社が143か国を対象として行った宗教に関する国際調査では、日本は世界で8番目に宗教を重視しない国としてランクされているが、生まれ変わりを信じている日本人はなんと43%に達したのである。内訳を見ると、高齢者よりも若年層、男性よりも女性の方が「信じている」比率は高い。

生まれ変わりの主張はあらゆる時代を通じて世界のほぼ全域で発生している。「生まれ変わり」の死生観は世界中の民俗文化において見られるが、前世の記憶を持っていると称する者の逸話をもとになって発生した可能性がある。

子供が前世を語る事例が世界中の共同体の中で一定の割合で発生してきたからである。「生まれ変わり」を想起させる前世の記憶を持つ子供は東南アジアや南アジアに多いが、「生まれ変わり」の信仰を持たない北アメリカの白人にも300例ほどの事例が見つまっている(注79)。

19世紀に活躍したドイツの哲学者ショーペンハウエルは「もしアジア人にヨーロッパの定義を聞かれる羽目に陥ったら、私としてはこう答えざるをえまい。人間は生まれた時に始まり、無から造り出される、という途方もない妄想に完全に支配されている世界の一角である」と述べた(注80)が、西洋思想においても「生まれ変わり」という考え方はけっして異端ではなかった。

(注76) サトワント・パスリチャ「生まれ変わりの研究」日本教文社、1994年、245頁

(注77) 竹倉史人前掲書、13頁

(注78) 竹倉史人前掲書、170頁

(注79) 竹倉史人前掲書、192頁

(注80) イアン・スティーヴンソン「前世を記憶する子どもたち」日本教文社、1990年、51頁

## 16. 「生まれ変わり」を認めていた西洋古代思想

古代のエジプト人が「あの世とこの世との間に大きな隔たりはない」と考えていたように、太古から私たちは死と死後のことを意識してきた。

西洋哲学の出発点と言われるギリシャでは、「生まれ変わり」の観念はオルフェウス教（密儀宗教の一種）から始まったとされ、哲学においても魂や形而上的世界の实在が想定されていた（注81）。

古代ギリシャの数学者として知られるピタゴラスは前世の記憶を持ち、「不滅の靈魂」「靈魂の輪廻転生」「修養による靈魂の浄化」を弟子たちに唱えていた。

「魂の不死を信じて平然と死ぬことができる心の訓練が哲学の使命である」と弟子たちに教えていたソクラテスにとって、自らの死は永遠の生、人間の魂の永続性を象徴するものであった。

ピタゴラスの世界観を継承したプラトンも、著書「パイドン」「国家」などの中で「死者の魂は一定期間を過ぎると生まれ変わる」と主張している。

古代ギリシャ思想においては、死によって靈魂と肉体は分離し、前者は不滅とされていたのであるが、例外はソクラテスと問答を行った当時のソフィスト（知恵ある者）たちであった。彼らは現代人のような唯物論的な考え方を有していた（注82）。

スピリチュアリティの語源であるラテン語の「スピリチュス」という言葉は①靈魂②生きがいや精神力③目に見えない生命力（東洋で言う気）を意味する（注83）。

キリスト教（新約聖書）では「生まれ変わり」の記述は少ない。

「イエスが信者の兄弟（ナザロ）の墓（洞穴）の前に行き入り口の石を取り除くと生き返ったナザロが墓の中から布で巻かれたままの死装束で出てくる」といった出来事やイエスが「洗礼者ヨハネが数百年前に死んだ預言者エリヤだ」と述べているくだりが残っている程度である（注84）。

「生まれ変わり」の観念は、異端とされるグノーシス（2～3世紀に地中海世界で流行した宗教）やカタリ派（12～13世紀のフランス南西部で活動したキリスト教徒）などで唱えられていたとされているが、初期の聖書には生まれ変わりの記述が多数存在していたことが確認されている。

現在の聖書がその痕跡をとどめていないのは、キリスト教を支配の道具に利用しようとしたコンスタンチン大帝が325年新約聖書の生まれ変わりに関する記述を削除したからである。その後553年にコンスタンチノーブルで開かれた宗教会議で「生まれ変わり」が完全に否定され、「個々人の死はいったん無に帰するとしても歴史の終末の最後の審判において救われるべき者は救われ、以後は永遠に生きる」という教えに取ってかえられたのである（注85）。

旧約聖書にも「生まれ変わり」の観念は登場しないが、ユダヤ教には「ギルガル」という「生まれ変わり」を前提とする信仰がある（注86）。

（注81） 榎尾直樹他「人間に魂はあるのか？」国書刊行会、2013年、14頁

（注82） 榎尾直樹他前掲書、15頁

（注83） 田中朱美他「科学とスピリチュアリティの時代」ビイングネットプレス、2005年、57頁

（注84） ジム・タッカー「転生した子どもたち」日本教文社、2006年、237頁

(注85) 加藤直哉前掲書、182頁

(注86) 加藤直哉前掲書、181頁

#### 17. 「生まれ変わり」を否定した西洋近代

その後時代が下って16世紀、近代哲学の祖といえるルネ・デカルトは方法的懐疑を経て「我思う、ゆえに我あり」という命題に到達し、そこから神の存在証明を行った。「この『我』を『我』たらしめる精神は身体から独立したものだから、たとえ身体がなくなっても死滅するものではなく、不滅である」とデカルトは考えたが、死後の靈魂の不滅性についての論証は精緻ではなかった(注87)。

18世紀後半に活躍したエマニュエル・カントは、存在が証明できない神や魂を前提とせず、理性によって普遍的な道徳的規範を導出しようとした。

カントは、靈魂については「あれこれ想いを語ることはできてもそれについて知ることは不可能である」として考察の対象としなかったが、当時の大科学者にして大靈能者とされていたスウェデンボルグについて調べ、靈魂の存在に関する著作「視靈者の夢」を1766年に出版していた。「靈魂の存在の可能性は高い」と考えていたカントは、「実践理性批判」においては「魂の不滅が前提でなければ、無限の進歩はできない、死後の有無は証明できないが要請される」と主張していたのである(注88)。

分水嶺となったのは産業革命である。

欧米ではド・ラ・メトリーが主張した「人間機械論(1747年)」のように、無神論的・唯物論的哲学が影響を増していったからである(注89)。

さらに近代自然科学が隆盛を極めるようになると、仮説と実験結果との一対一対応によって経験的実証ができることだけを客観的な自然科学の対象とし、それ以外の対象を論じるのは疑似科学とされていった(注90)。このような自然科学主義においては「靈魂や魂を論じることは科学的な議論ではない」とされ、「靈魂や神の存在は科学的に実証できないからそれらを信じることは迷信である」と考える人が多くなったのである。

人間の思考や感情といった精神的な働きについては、現在心理学などで科学的な研究が行われているが、その主観的な精神作用を超えて目に見えない「魂」の存在の有無についての議論を行うことはタブーになってしまった。

だが内情は違ふようである。

キリスト教に依存しない死生観を打ち立てようとした実存主義者のジャン＝ポール・サルトル「死は虚無である」と主張していたが、死の数年前に自身の存在の根拠として神を設定しなおしている(注91)。

いかに死の自覚から本来の自己に目覚めようと、その自己の不滅性が信じられなければ、人生は虚無になってしまうと考えたからだろうか。

このように世界の西洋思想でもつい最近まで「生まれ変わり」の観念が疑問の余地なく受け入れられていたのである。

どの文明・文化・部族をみても、「目に見えない次元」を認めないものはないと言っても過言ではない。

魂は「不可視で経験的に観察することができない」と定義されているのだから、経験的な方法でその存在を実証することは原理的に不可能である。

しかしカントのひそみにならえば魂の存在を即座に否定するのではなく、「現在の科学では証明できないもの」とすべきではないだろうか。

千葉大学の小林正弥教授は「自然科学的な方法以外の学問を疑似学問とするのは間違いである。人間の精神に関しては自然科学的な方法だけでは十分ではないからこそ人文社会科学において解釈学を始め精神科学と言われる学問的方法が存在しているのである。さらに形而上学を含む哲学は別の種類の学問として存在の価値を持っている。魂の实在を科学的に証明することはできなくてもその实在の蓋然性を高めるような傍証はできる（注92）」と主張する。

（注87）榎尾直樹他前掲書、15頁

（注88）加藤直哉前掲書、191頁

（注89）榎尾直樹他前掲書、16頁

（注90）榎尾直樹他前掲書、17頁

（注91）内藤理恵子「誰も教えてくれなかった死の哲学入門」日本実業出版社、2019年、177頁

（注92）榎尾直樹他前掲書、34頁

#### 18. 生まれ変わり研究のメッカ：ヴァージニア大学

「生まれ変わり」の存在を科学的な方法で長年研究している組織がある。

ヴァージニア大学医学部の精神行動科学科知覚研究所（DOPS）である。

ヴァージニア大学は1819年に第3代アメリカ大統領トマス・ジェファソンによって設立された由緒ある大学だが、1958年から生まれ変わりの記憶を持つ子どもについての調査研究を行っている。

研究を始めたイアン・スティーヴンソン教授（精神医学が専門）が、書籍・雑誌などで報じられている「前世の記憶」にまつわる44の事例を分析して「前世の記憶とされるものによる死後生存の証拠」という論文を1958年に発表したことがきっかけである。

スティーヴンソンはその後海外の事例も加え1966年に「生まれ変わりを思わせる二十の事例」を出版したが、これらの研究がコピー機の父と呼ばれるチェスター・カールソンの目にとまり、カールソンによる多額の寄付（100万ドル（現在の日本円で約10億円）のおかげでDOPSが設立されたのである。

「生まれ変わり」研究の対象となる条件は以下の通りである（注93）。

- ①潜在記憶などでは説明のできない事実と確認されるべき証拠がかなりあること
- ②現世では明らかに学習されたはずのない複雑な技能（外国語を話す、楽器を演奏するなど）を持っていること
- ③本人の記憶する前世時代に受けた傷に対応する同じ場所に母斑（あざ）があることである。

DOPSの調査員は子どもの話す内容が事実に合致しているかどうかを所定（200以上）の項目別にチェックし、「本人が通常的手段ではとうてい知りえない情報を語っている可能性がある」と認定された場合にはデータベースにファイリングされることになっている（全大陸から2600件以上のデータを収集）（注94）。

スティーヴンソンはさまざまな実地調査を行ったものの、「こういう現象はたしかにあ



るが、だからと言って前世が人間にあるとは断定できぬ」と慎重な態度を取り続けた。

「前世について直接知っているという者の主張を可能な限り検討し、それによって得られた結果を他者に伝え、自分が調べた証拠はすべて見せるから後は読者が判断してくれ」という姿勢を貫いたのである。

ヴァージニア大学のスタンスも「生まれ変わり」を暗示するような現象が世界各国にあると発表しているのみであり、「生まれ変わり」があるとは断定していない。

スティーヴンソンはいくつかの権威ある医学専門誌に論文を投稿して好意的な反応を得ている。例えばアメリカの精神科医のハロルド・リーフ氏は「自分自身は生まれ変わりを信じていないが、事例調査におけるデータ収集は系統的かつ抜け目なく行われており、その分析の明晰さは疑う余地がない」と評している（注95）。

エセ科学を告発する団体の創設メンバーであるカール・セーガンを「生まれ変わりと呼ばれる現象はまじめに調べてみるだけの価値がある（注96）」と言わしめている。

またある雑誌においては「スティーヴンソン氏は几帳面で綿密で慎重な一流の研究者である。一連の研究は彼が巨大な誤りを犯しているか、『20世紀のガリレオ』として知られることになるかのいずれかだろう（注97）」と絶賛されている。

科学の世界では「再現性」、つまり同じ現象が何度も観察されることが重要である。この点でも他の研究者たちが独自に調査し、彼と同じような発見を行っている。彼らの一部はスティーヴンソンが調査した事例を再調査し、証言に大きな食い違いがないことを確認している（注98）。

このような長年の取り組みにより、スティーヴンソンは「生まれ変わり」という現象を逸話レベルから科学的研究の正当な対象という地位にまで引き上げたのである。

スティーヴンソンは2007年に亡くなったが、その後を継いだのはジム・タッカー氏である。精神科の開業医だったタッカー氏は1996年から生まれ変わりの研究を開始しているが、現在「波動関数の崩壊」などの量子物理学の理論を援用しながら「生まれ変わり」が生ずる謎を解明しようとしている（注99）。

（注93）遠藤周作「深い河」講談社、1996年、38頁

（注94）竹倉史人前掲書、153頁

（注95）竹倉史人前掲書、165頁

（注96）竹倉史人前掲書、167頁

（注97）大門正幸「なぜ人は生まれ、そして死ぬのか」宝島社、2015年、30頁

（注98）大門正幸前掲書、124頁

（注99）ジム・タッカー「リターン・トゥ・ライフ」ナチュラルスピリット、2018年、272頁

## 19. 何が生まれ変わるのか

「生まれ変わり」についての詳細な分析を行ったスティーヴンソンは、「何が生まれ変わるのか」についての考察も行っている。

スティーヴンソン氏の仮説は「心搬体（死後にまで記憶を持ち越す媒体）」である。一般向け書籍の中では「人格」や「肉体のない人格」と表現している（注100）。

前世から持ち越す可能性のある記憶としては、「イメージ記憶」や「行動的記憶（習慣

を始め一個の人間に見られる自動的な行動)」のほかに「識闕下認知的記憶（実際保持していながら身に付けた覚えのない知識）」などがある（注101）という。

科学の世界では、精神や認知といった分野はまだ謎の多い領域である。最先端の脳科学をもってしても、「意識」について解明できていないのが現状である。

「人の生命活動が終わった後意識も失われるという見解は、あくまで『意識が脳細胞の働きに過ぎない』という仮定の上での話である（注102）」

このように指摘するのはダライ・ラマ14世である。

ダライ・ラマ14世の「生まれ変わり」に関する見解は以下の通りである。

①仏教では死後も意識は消失せず、他の生命の意識として生まれ変わるものと考えている。輪廻が運んでいるものは私たちが日頃感じている意識とは違い、もっと究極的なレベルにおける意識のありようである（注103）

②肉体が死んで別の物質に分解されるように意識の本質は生命全体のサイクルの中へ戻り別の生命の意識を生み出す素となっている（注104）

③因果の仕組みは非常に繊細かつ複雑で人間が正確にそれを予測したり把握したりすることは不可能である（注105）

仏教では、過去の行為は細大漏らさず記憶され、現在の現象を生み出す種子として無尽蔵に蓄えられていると考えられている。その一切の行為を記憶されているのは「阿頼耶識」である（注106）。

阿頼耶識は深層心理に相当するものであり、感覚・知覚または思考作用の底にそれらの諸作用を生み出す根源的な心があると考え、心の動きや感情、表情、生きる力など人生のすべてのよりどころとされている。

阿頼耶識では私たちが日常使っている先天的直観形式（時間や空間）によっては把握できないとされているが、「唯識思想を打ち出した人々が、ヨーガ（サンスクリット語で「統一」という意味）という実践を通して自らの心の奥深くに沈潜し、記憶が潜んでいる蔵のような場所を発見した」とされている（注107）。

仏教ではこの阿頼耶識が「生まれ変わり」をする主体として考えられている。

人がこの世で経験していることは過去に作ったカルマが幾つもいくつも重なり合って成立しているが、その現れ方に規則性がない。仏教には「阿頼耶識に蓄積された無数の記憶の種子は、それぞれ時間差をもって熟してくる（現実化してくる）ことから、人間がそれを正確に予測することは不可能」だとする「業異熟」という考え方がある（注108）。

（注100）イアン・スティーヴンソン前掲書、45頁

（注101）イアン・スティーヴンソン前掲書、47頁

（注102）ダライ・ラマ14世「傷ついた日本人へ」新潮社、2012年、133頁

（注103）ダライ・ラマ14世、134頁

（注104）ダライ・ラマ14世、158頁

（注105）ダライ・ラマ14世、165頁

（注106）横山紘一「『唯識』で出会う未知の自分」幻冬舎、2018年、40頁

（注107）横山紘一前掲書、109頁

（注108）町田宗鳳「死者は生きている」筑摩書房、2016年、133頁

## 20. 日本における「生まれ変わり」の研究者

話をヴァージニア大学に戻すと、DOPSで2013年3月から1年間客員教授を務めていた日本人がいることを紹介したい。言語学を専門とする大門正幸中部大学教授である。

大門氏の研究目的は「人間の意識（魂）が死後も残る可能性について経験科学の立場から探求すること」であり、世界中から収集された2030例に上る「過去生を語る子供」のデータについての分析を行い、以下のことが判明した（注109）。

- ①事例が報告された国は40か国であり、20例以上の報告があるのはインド、スリランカ、タイ、トルコ、ナイジェリア、ミャンマー、レバノン、アメリカ、カナダの9か国だった。北米のネイティブ・アメリカンの事例とナイジェリアの事例はすべて同一家族か近親者間での生まれ変わりだった。インドで過去生の記憶を持つ子供の割合は500人に1人だった。
- ②過去生の人物が見つかった例は73%だった。
- ③同じ国、同じ村で、場合によっては同じ家族に生まれてくるケースが多かった。
- ④子供が過去生について語り始める平均年齢は2歳10か月、自分からは話さなくなる平均年齢は7歳4か月、過去生の死から次の誕生までの平均年月は4年5か月だった。
- ⑤前世の記憶を持っているのは男の子が多かった（7割）。性転換事例はほとんど見つかっていない。
- ⑥過去生で非業の死を遂げた事例は67%だった。
- ⑦生まれ変わりによって経済的環境や社会的地位がどうなるかについての一定の法則性は見つからなかった
- ⑧過去生で悪いことをしたので現在の身体に障害があるという事例はまれだった。
- ⑨自殺した前世を記憶していた事例は23例あった。

この分析結果について大門氏は以下のような形で解釈を行っている（注110）。

- ①死んだ場所と生まれた場所は近いのは強い感情的なつながりが続いていたからだろう（「同じ家族のところにもう一度生まれたい」という願望）
- ②前世の記憶を持っている男の子が多かったのは非業の死を遂げた割合が多かったからではないだろうか（本来働くべき忘却のメカニズムが衝撃的な死によって働かなかったという解釈が可能である）。
- ③因果応報の法則は世間の俗説（現世の行いが来世の運命を決する）ほど単純ではない（生まれ変わり信仰を持ちながら「カルマ」という考え方を取らない民族が多い）
- ④生まれ変わりという考え方は、自殺しても苦しみは終わらず、苦しみの生ずる場所が変わるに過ぎないことを自殺願望を持つ者に気づかせてくれる335、

以上が大門氏の研究成果だが、子ども達が語った過去生の人物が見つかった事例が7割を超えているという事実は驚きである。

過去生の記憶を持っているかどうかは、前世の最期が大きく影響していることも興味深い。すべての子どもが過去生の記憶を持っていないことから、タッカー氏は「すべての人間が『生まれ変わり』を経験しているとは言えない（注111）」と主張しているが、「過去生の記憶を持っていない子ども達の前世の最期は不幸なものではなかった」と解釈することもできる。

日本ではかつて「7歳までは神の内」と言われていたが、過去生を語る子どもが「神霊

の加護」や「始原的靈性」によって満たされていると信じられていたからかもしれない。

(注109) 大門正幸前掲書、144頁

(注110) 大門正幸前掲書、146頁

(注111) ジム・タッカー「転生した子どもたち」、257頁

## 21. 日本でなぜ「生まれ変わり」の研究が進まないのか

「生まれ変わり」の研究が行われているのはヴァージニア大学ばかりではない。

現在「生まれ変わり」の研究が行われているのは、米国以外にスウェーデン、英国、フランス、イタリアなどである、著名な研究者としてはインドの心理学者サトワント・パシリチャ、アイスランド大学の心理学者エルレンドゥル・ハーラルドソン、ハーヴァード大学で博士号を取得した人類学者アントニア・ミルズ、タスマニア大学の心理学者ユルゲン・カイルなどが挙げられる(注112)。

「生まれ変わり」に関しては、米国心理学会が1977年からこれをテーマにしたシンポジウムを定期的で開催している(注113)。

物事が入り組み複雑な現実の世界では「決定的な証拠(プルーフ)」が得られることはめったにない。入手できるのは「証拠(エビデンス)のみ」であるが、既に膨大な量の証拠が公になっている(注114)。

「生まれ変わり」という観念について、「信じる・信じない」のレベルではなく、「知的・理性的」レベルで判断できる時代になったと言っても過言ではない。

大切なのは固定観念を持たず現実に起こっている様々な現象をつぶさに観察することであり、部分をつなぎあわせて全体像を把握することではないだろうか。

「日本は不思議な国、明治以前には『霊』の存在を当然のこととしてきたのに、今では過去の欧米に追従してこの種の現象を真面目に考えようとしないう風潮が特に科学者の間に強くある」

このように指摘するのはカール・ベッカー京都大学特任教授である(注115)。

欧米諸国が「生まれ変わり」についての研究が着実に進んでいるのに対し、日本で過去の水準から一步も進もうとしないのは皮肉というほかはないのだろう。現在の日本で「前世」ブームが起きているのにもかかわらず、である。

科学とは本来科学的な方法を使った真理の探究を行うべきなのだが、日本では五感で感じられるものを頼りに表面的なレベルから物事を分析している傾向が強いようだ。

明治維新の際、技術の導入を急ぐあまり西洋文明の本質の理解がおざなりとなったと指摘されることが多いが、その体質が現在でも残っており、近代実証主義の枠から外れたものを研究対象から排除しているように思えてならない。

西洋思想における形而上学とは「目には見えないけれども確実にあることを考えられるもの」という意味であるが、日本では第一線の研究者になればなるほど「人生に役立つことを考えては科学にならないと頑なに考え、このような考え方に一線を画すことにプライドを持っている(注116)」との指摘もある。

日本の科学界は「生まれ変わり」の存在を否定しているというよりむしろ無視していると表現した方が適切だと思われるが、人間の五感で把握できるのはこの世界のごく一部だけである。

超越的なもの（見えない世界）を扱えなくなっているのが日本のアカデミズムは、多死社会の到来で社会との接点を失ってしまうのでないだろうか。

（注1 1 2）ジム・タッカー「転生した子どもたち」、27頁

（注1 1 3）大門正幸前掲書、236頁

（注1 1 4）ジム・タッカー「転生した子どもたち」、10頁

（注1 1 5）大門正幸前掲書、237頁

（注1 1 6）遠藤周作他「『深い河』をさぐる」文藝春秋社、1997年、136頁

## 2.2. 医療資源となる「生まれ変わり」の観念

ベッカー氏は長年「生まれ変わりの死生観こそが日本人の伝統であり、日本人の知恵を切り捨てる必要はない。死んだら終わりという迷信をやめて、日本人の伝統に基づいた人間的な医療、人間的な看取りに関わる研究を行ってほしい」と訴えてきた（注1 1 7）。

東大医学部病院の緩和ケアの医師が「死生観をもっているかどうか、それはどんな高尚なものでも幼稚なものであっても、ともあれ自分なりの死生観をもっているかどうか最期の臨床において態度や振る舞いに大きな差が出てくる（注1 1 8）」と述べている。遺族の悲嘆もかつてよりひどくなっていると言われている。

科学的思考に慣れている私たちはすべてを科学的根拠で説明しようとする傾向があるが、私たちが生きる世界は、科学的根拠だけでは説明できないことで溢れている。

科学の語源は「知る」を意味するラテン語から派生したものであるが、科学がもたらしてくれる「知識」自体は本質的な意味を持っていない。

科学的事実はそのままで人生の意味や価値について何も語ってくれないが、そこにどのような意味を見いだすかはあくまで人間の主観的な行為である。

人は茫漠とした「死後の世界」ではなく「ふるさと」であるところの「あの世」に還っていきたい、母のような温かい存在に自分の魂を優しく受け止めてほしいと考えているのにもかかわらず、現在の終末期医療の現場でこれが満たされることは少ない。

私たちが「死んだらどこへ行くのか」についての信念を持ち、「安心立命」の境地を手にするのは容易ではないが、生まれ変わり事例に関する知識が「心のクスリ」として働くのではないだろうか。

大門氏が「『死後の生命』や『生まれ変わり』が本当にあるのかどうかという『真理』には関心がなく、生きがい感の向上という『現象』にこそ関心を抱く（注1 1 9）」と主張するように、「生まれ変わり」の観念を知ることによって「死の恐怖」や「死に対する敗北感」が軽減されることが多いだろう。

「生まれ変わり」の観念が人生をどのように変える力を持っているかという主観的な価値を問う研究が世界では新しい流れとなりつつある。多くの研究結果において、「生まれ変わり」の観念が、人々の「人生の意味」を増大させたり、病人が苛まれる「死の不安」を軽減したり、愛する人を看取った遺族の「死別の悲しみ」を癒す力を持っていることが実証的に支持されている（注1 2 0）。

日本でも、医療やケアの領域において生まれ変わりという観念を「医療資源」とみなし、その治療的効果を定量的に測定したり、質的な分析を行う動きが出てきている。

「死を考えることは私たち生きる者にとって不安なく暮らすための保険のようなもので

ある（注121）」

このように主張するのは「人は死んだらどうなるのか」の著者加藤直哉氏である。

現役の開業医である加藤氏は3本の論文（「臨死体験」「催眠療法による過去性体験」「生まれ変わり」）で海外の大学で博士号を取得している。

終末期医療の問題を痛感した加藤氏は、死を理解し恐怖の対象としないためのマニュアルを作成し、マニュアルを読む以前とその後死に対する恐怖心が有意に低下したことを実証している（注122）。

加藤氏は「死にゆく人が死の不安を口にするなら死生学研究の話をしてあげるべきである（注123）」と主張するが、加藤氏が述べる「死生学」は従来の死生学とは異なり、「生まれ変わり」の観念をも認める画期的なものである。

（注117）山折哲雄他前掲書、169頁

（注118）大城道則他前掲書、230頁

（注119）大門正幸前掲書、29頁

（注120）竹倉史人前掲書、169頁

（注121）加藤直哉前掲書、3頁

（注122）加藤直哉前掲書、200～203頁

（注123）加藤直哉前掲書、207頁

### 23. 多死社会における幸福とは

死にゆく者が最後に静かな時間を過ごし、介助した者もその死によって励まされるといった死こそが自然な死が理想であるが、現実には甘くない。

人生の最期に何とか辻褃を合わせたいと思ってもできないときに、それを包容してくれる大きなものが欲しくなる。日本人は死んだ後について個々別々の考え方を持っているが、それは社会全体の考えではないからどこか心もとないのが現状である。

第三者が何らかの死生観を伝えるには工夫が必要である。専門家が患者自身のイメージをうまく引き出し、患者自身が潜在意識や深層心理において自分が一番望んでいる死生観を見つけ出し、それを受容できるようにすべきである（欧米では「スピリチュアル・カウンセリング」と呼ばれている）（注124）。

日本では「無宗教」で「死んだら何も残らずすべてが終わる」と言い張っていた患者でも、自分が末期にあると感じた時、死後に対する疑問や期待を持つようになるケースが多いとされている。「死んだら終わり」と嘯いていた人ほど「死が怖い」と感じる傾向があり、終末期の患者は、死後の魂の行方についてだけでなく、生涯の実存的な意味についても考えるケースが多い。明確な宗教心を持たない日本人は、人生を回顧し話したくなるようで、論理構造などは見えなくても実存的なストーリーを繰り返し語ることによって自分の人生を確認し、また他者に認めてもらいたいという願う気持ちが強い（注125）。

ダライ・ラマが「いくら欲望が満たされても本当の『幸せ』にはたどり着けないことは20世紀の歴史が証明してくれた（注126）」と指摘するように、刺激による「心の高まり」とは違う静かで穏やかな「心の平和」こそが私たちが追い求めてきた本当の「幸せ」なのかもしれない。「心の健康の時代」と言われているゆえんである。

これまでは結婚や就職といった人生の様々な出来事から幸福度を測るのが常だったが、

多死社会の到来により今後幸福度を測る際に「どのような死生観を有しているか」という視点が重要になってくるのではないだろうか。

世界45か国を対象とした国際社会調査プログラムの宗教意識に関する調査結果（2008年）で、死後の世界を信じている人が幸福である割合はそうでない人が幸福である割合の4倍だった（注127）。

中長期的展望がないと生きる意味が湧かないのが人情である。「生まれ変わり」の観念を持てるかどうかは日本の幸福度を向上させる鍵になるのかもしれない。

「生まれ変わり」の観念が幸福感に与える影響は高齢者に限られない。

立教大学の太石和男先生らのグループは、「PIJ」テストという生きがい感を測るテストを用いて生まれ変わりを核とした飯田史彦氏の「生きがい論」を紹介する講義を受けることによって、生きがい感が大きく向上した」という研究結果を公表している（注128）。

また、愛媛大学の中村雅彦教授（当時）と井上実穂氏は、大学生や専門学生820人を対象とした死生観に関するアンケート調査に基づき、死後「何も残らない、肉体とともにすべて滅びる」と考えるグループは、死後「肉体は滅びるが、精神・魂は永続する」と考えるグループよりも人生に関する満足度が低いことを明らかにしている（注129）。

愛媛県・香川県在住の国立大学生及び専門学校生（電子系・福祉系・看護系）820人に対し質問票を送付し、そのうち800人（男性304人、女性496人）から有効回答を得た（有効回答率97.6%）。調査は1998年6月から7月にかけて実施された。

死生観における死後存続概念を有する大学生は、男女ともに生に対して肯定的イメージを持つとともに、自己中心的な生き方について否定的だった。

死後存続概念を有するに至った理由として挙げられるのは、死に対する経験が多かったことである。テレビ・ビデオ等による影響よりも近親者の死による影響の方が強かったことは、近親者の死は否定的な側面のみを有しているのではないことを意味している。

電子系専門学校生の多くが、死生観において死後存続の概念を持たず、宗教性を否定し、自己中心的な生き方の傾向が強いことが示されたことは注目に値する。

この結果について中村氏は「大切なことはいかにして現代の情報化社会に『ケア』という概念を取り入れ、人間的なつながりを感じることができるかである」と指摘している。

人が1人では死ねない多死社会では、「自己責任」や「自己決定」ではなく、「人間はケアの関係の中でひとりの個となれる」という考えが常識にならなければならない。

他人から認められ世界の中に自分の居場所を得ることができるというメリットがある「ケア」だが、効率を重んじ利益追求が第一の経済至上主義の観点から、評価の対象になりにくいのが実情である。そのせいで人生の喜びの源を遠ざける結果を招いているのは残念ではない。

（注124）田中朱実他前掲書、59頁

（注125）田中朱実他前掲書、61頁

（注126）ダライ・ラマ14世前掲書、41頁

（注127）大門正幸前掲書、275頁

（注128）池川明他前掲書、145頁

（注129）中村雅彦他「死生観が心理的幸福感に及ぼす影響」愛媛大学教育学部紀要、教育科学第47巻第2号、2001年、59～99頁

#### 24. 平田篤胤という先駆者

「生まれ変わり」の研究で世界のトップを走っているのはヴァージニア大学であることを紹介したが、日本の事例に出会ったことでスティーヴンソンが研究を始めることになったという興味深い事実がある。

小泉八雲が1898年「ブッダの畑の落穂拾い」という随筆集を英語で刊行したが、その中に「勝五郎の生まれ変わり」の話が収録されていた。この本を手に取り、勝五郎の再生譚に好奇心をかきたてられたのがスティーヴンソンだったのである（注130）。

小泉八雲が書いた「勝五郎の生まれ変わり」の元になっているのが、平田の「勝五郎再生記聞」（1823年）である。江戸時代の「生まれ変わり」の記録としてもっとも有名なものであり、民俗学研究のさきがけとしても評価されている。

話の舞台は1822年11月、現在の八王子市東中野である。現在の多摩動物園付近で幼くして亡くなった藤蔵が、山一つ越えた現在の八王子に勝五郎として生まれ変わったのである。前世の記憶を語るという勝五郎少年の噂は江戸にまで広がり、勝五郎が江戸に来ていることを耳にした平田は自宅に招き、聞き取り調査を行ったのである。

江戸後期の国学者として知られる平田の学問の目的は、靈魂の行方や在り様を探ることによって、おのれの内なる「大倭心」を確立し、自らの内に「靈の真柱」を築くことだった。鬼神妖怪に惑わされない確固とした精神こそが「大倭心」であり、「大倭心の鎮り」とは鬼神妖怪や幽冥界の存在を確信することによって安心を得るとの考え方に基づいている（注131）。

「『安心をつくる』思想を得るためには何よりも死の問題を解決しなければならない」と考えた平田は、国学者の中で「生まれ変わり」が事実として存在しうると認めた唯一の存在だったとされている。

民俗学の祖とされる柳田国男は「前もって自説がありその根拠づけに事実を使っている」として平田の研究手法を批判したが、自らの著作「遠野物語」には平田の著作が少なからず影響していると言われている（注132）。柳田の父は平田派の影響を受けており、柳田国男は1905年に「幽冥談」において平田流の幽冥観を論じている（注133）。

この世に起こるすべての事象の理を知ろうとしたあまりに結論の出し方が短兵急過ぎたと批判されることが多い平田だが、意外なことに一つのことを理をもって徹底的に究明しようとする西洋人の学問的態度を称賛していた。

国学者は儒学を批判し自説を主張する際、洋学の進取性や実証性を利用したからだが、国学と洋学は、儒学や仏教を偏重する日本社会の一般的風潮を批判するという共通の問題意識をもって、同時期に誕生した新興の学問思想だった（注134）。

平田は可能な限り科学的研究方法を用いて真実を解明したが、それでも解明できないものについても諦めずに「どのような方法で解明できるか」と格闘したのである。

「以前は未知の領域であった事柄が蘭学の発展によってしだいに解明されてきており、ついには幽冥界のことまで知ることができる時代が到来した」と考えていた平田に勝五郎少年の情報もたらされたのは、48歳になった年の初夏だった。「死後の靈魂の行方がわかる、これは何としてでもフィールドワークしなけりゃならん」と調査に精を出し、勝五郎を何年もそばに置いて、インタビューを繰り返した。結論に至るプロセスはむしろ慎



重すぎるほど慎重だったのである。

平田の思想の特徴は「幽冥界」という死後の世界を構想したところにある。

大国主神が治めるとされる幽冥界は現世に生きる山や川や空を背景とした私たちの生活から離れたところにはなく、今私たちが生きているこの空間に隣接し同時に存在しており、亡くなった人たちはこちらからは見えないけれどすぐそばでこちらを見守っている。人間の死後について明らかにすることは当時の人々にとっても最大の願望であったが、平田が唱える思想は彼らに受け入れやすいものであった。

(注130) 竹倉史人前掲書、199頁

(注131) 鎌田東二「平田篤胤の神界フィールドワーク」作品社、2002年、34頁

(注132) 築瀬均前掲書、170～171頁

(注133) 川久保剛他「方法としての国学」北樹出版、2016年、90頁

(注134) 川久保剛他前掲書、77頁

## 25. 明治維新の原動力となった平田の思想

平田には死後の門人が多かった。

幕末の関東農村では間引きが広がる傾向にあり、村役人達を悩ませていた。

荒廃した村の立て直しのために村役人達は、平田の幽冥学を根拠にして「間引きをすれば神の罰を受ける」と村人に訴えかけることによって、間引き防止運動や捨て子養育所設立運動を展開したのである(注135)。

「われわれはその一挙手一投足をあの世から監視されている。だからこそ身を清めこころを正直にしなければならない」

平田の思想は「死者の魂によって現世の私たちの生は成り立っている」ということに気づかせてくれる。

平田はさらに「新しい古」を唱える。

「新しい古」とは、新時代に対応するため外国の新知識を積極的に摂取する一方、日本のアイデンティティ・伝統文化を保全、継承するという考え方である(注136)。

平田に惹きつけられて入門する者の中には、「現実社会で民衆が幸せになるにはどうしたらよいか」という思考を常にめぐらせ、時には実際に支配者に向けた行動をおこす者が少なからずいた。

「古代に帰って現代の生活を根から覆し、全く新規なものを始めよう」とする平田の主張を彼らは「そういう共同社会を取り戻すためには天皇を担いだ民衆の革命が必要だ」と受けとめたことから、平田は「新しき古」を説くことによって明治維新をもたらす原動力の一つになったのである(注137)。

このことが災いしたのだろうか、平田は明治時代に成立した国家神道の靈感の源となった人物ということで戦前の日本の諸悪の元凶とされてきたきらいがある(注138)。

近代社会でバラバラになった個人にとって救いになったのはナショナリズムだった。目先の利害にのみり込み「なぜ生きるのか」の指針を失った人々に対して国家が「死の意味付け」を与えたのである(わたしの死は多くの人に悼まれ、生きてきたことにも意味がある)。ナショナリズムは死を媒介としているのだが、大きな存在のための犠牲としてしか自身の価値を認められなくなることは、私たちにとって決して良いことではない。

19世紀以降国民は義務として戦争に駆り出されることになるとともに、国家のために死ぬことが美徳されるようになったが、とどのつまりは2度にわたる世界大戦だった。

和辻哲郎が戦後「日本倫理思想史」の中で平田のことを遺恨をこめて「変質者」又は「狂信の徒」と攻撃を加えたことから、近代日本における国粹主義的イデオログとされてしまっている（注139）が、平田の思想は日本古来の精神に立ち返ろうという純粋な思想であり、戦争を鼓舞するものではけっしてない。

（注135）吉田麻子「平田篤胤」平凡社、2016年、215頁

（注136）荒俣宏他「よみがえるカリスマ 平田篤胤」論創社、2000年、137頁

（注137）荒俣宏他前掲書、111頁

（注138）荒俣宏他前掲書、2頁

（注139）子安宣邦「平田篤胤の世界」ペリカン社、2009年、227頁

## 26. 自我のあり方を変える「生まれ変わり」の観念

私たちは死から目をそらし死の恐怖を意識しなくなっているが、無意識レベルでは死の恐怖に支配される人生になっているのではないだろうか。

通常は病的な状態だとは思っていないが、死と直面して生きている先住民と接すると自分たちの異常さに気づかされる。死の恐怖を抑制することで無意識レベルで発生する「攻撃性」が暴走する社会になっている恐れがある。

「死を想うと人は他者に優しくなる」という研究結果が示す（注140）ように、混迷する現代を救う道は、生まれる前の自分に思いをはせるような非科学的なゆとりを各人が持つことにあるのかもしれない。

「生まれ変わり」が広く信じられているブータンでは、「身内」の感覚が一挙に拡大する。現世の身内だけではなく過去世の身内もメンバーに入ってくるからである（注141）。

ブータンでは自分の子が同時に他人の子でもあることから、「あの世」を介在して既成の「家族」の枠組みが緩やかに溶け出し曖昧になっている。

過去において構築された人間関係や信頼関係などの社会関係資本が当事者の死とともに廃棄されるのではなく、生まれ変わりという観念を媒介として新生児においても再利用されるというメリットもある（注142）。

世界は生者によってばかりではなく死者によっても共存的に支えられていることに気づくことにより、今まで無関係に思われていたものに関係の連続線が引かれ、新しい理解と関係が生まれてくる。

私たちを縛っている「自我」のあり方も変わってくるかもしれない。

「生まれ変わり」という観念は、「私」の凝縮性が弱まるからである。私たちは孤独な個我をそっと手放し、人と人との新しい繋がりを静かに生み出せるのかもしれない。

西平直京都大学教授は「『わたし』が複数になるのではなく『魂』が『わたし』になる感覚は愛おしい」と述べている（注143）ように、私たちが皆究極的な存在の一部であることに気づけば、私たちはもう少し忍耐強く、受容的で、愛情深い人間になることの手助けになるだろう。

「来世利益」という考え方も出てくる。今どう生きるかが来世につながると考えれば、自分の欲望だけをむさぼっているのではなく、欲を満たして得たものを社会にどのように

還元できるのかというところまで意識が及ぶからである（「おかげさま」）（注144）。  
功利主義のモットーが「最大多数の最大幸福」から「最大期間にわたる最大多数の最大幸福」に変われば、世代間倫理の問題の解決の一助になるだろう。

「生まれ変わり」を認めることで人の生き方が変わる可能性もある。

「長いタイムスパン」で人生を見ることができるようになるからである。

一つの人生だけで見る限り説明のつかないこともいくつかの人生のつながりの中では説明がつく可能性が出てくる。

現世だけを考えてしまうとこの世に生まれた意味がなかなかつかみづらいが、「生まれ変わり」を信じる人たちは「何のためにいきているのかよくわかる」「なぜ私はこんなに苦しまなければならないのか、今はよくわかる」と述べている。魂の成長のためと考えればどんな苦しみも意味を持つ、人生に無駄はないということなのだろう（注145）。

（注140）加藤直哉前掲書、11頁

（注141）西平直「ライフサイクルの哲学」東京大学出版会、2019年、314頁

（注142）竹倉史人前掲書、53頁

（注143）西平直前掲書、317頁

（注144）中村雅彦「祈りの研究」東洋経済新報社、2008年、148頁

（注145）西平直「魂のライフサイクル」東京大学出版会、2010年、158頁

## 27. 社会変革に資する「生まれ変わり」の観念

「生まれ変わることによって魂が成長する」という発想（心霊主義）は19世紀前半のフランスで生まれたが、これを強烈に支持したのは初期の社会主義者たちだった。彼らはフランス革命以降の社会的混乱の中で、カトリシズムに代わる新しいコスモロジーを模索していたからである。サン・シモン・フーリエは共産主義社会の祖型を考案した人物として知られているが、唯物論ではなく、霊魂の輪廻転生を前提とした独自の宇宙観を提唱していたのである（注146）。

同時期に英国で活躍していたロバート・オウエンが最終的に行き着いた先も当時流行していた心霊主義だった。心霊主義の流行の背景には、「啓蒙主義の限界を超えるところにこそ真理がある」という感性が重要な役割を果たしていた。「互いに慈しみ合いながら生きる理想的な共同体を作るためには、理性では捉えられないものに真理を求めるほかはない」との心理が強くなっていたからである（注147）。

論理的な意味合いだけでなく情的な次元での変革がなければ、私たちの立ち居振る舞いは変わらない。私たち人間は理屈だけで救われるほどに頭脳が発達した生物ではないからである。

英国のチャリティーズ・エイド・ファンデーション（CAF）は、2009年から125カ国以上の国々を対象に各国の寛容度を採点している。CAFは2019年10月に過去10年間の集計結果を公表したが、「この1カ月の間に見知らぬ人または助けを必要としている見知らぬ人を助けたか」という項目について、日本は125位と世界最下位だったという衝撃的な事実が明らかになった。

「社会的孤立度が日本は先進諸国で最も社会になっている。現在の日本社会の様々な問題の根底にあるのがこの点にある（注148）」

このように指摘する「人口減少社会のデザイン」の著者広井良典は、「規範や倫理というものは、時代を通じて一律なのではなく、その時代の社会経済の状況に依存して生成される（注149）」と主張する。

人間の倫理や価値、科学のパラダイムといったものは、歴史的な文脈の中でその時代の社会経済状況と深く関わりながら生成されるものであり、時代状況における人間の「生存」を保障するための手段として生まれるものだが、世界的に見ても孤立化が目立つ日本で「生まれ変わり」の観念をベースにした新たな規範や倫理の構築が求められている。

（注146）竹倉史人前掲書、118頁

（注147）荒谷大輔「資本主義に出口はあるか」講談社、2019年、117頁

（注148）広井良典「人口減少社会のデザイン」東洋経済新報社、2019年、20頁

（注149）広井良典前掲書、165頁

## 28. 輪廻家族という発想

「日本は共同体と機能集団、または血縁の原理と組織の原理という形で分化していない社会、いわば血縁を一つのイデオロギーにして、実際は血縁関係にないものを擬制の血縁関係で統制してきた社会だった」（注150）

このように指摘するのは「日本資本主義の精神」の著者山本七平である。

長い戦乱を経て平和な江戸時代となったが、江戸時代の社会秩序を支えていた思想が「忠孝一致」である。「孝」という血縁の原理を社会全体の原理に適用したのである。

社会全体が血縁の原理で統制しようとするれば、社会全体が擬制の血縁関係にあるという前提がなければならない。これがあってはじめて血縁でない社会組織が同族意識でつながることが可能となる。

それを可能にするには「生まれ変わり」の観念は有効である。周りにいる人たちはかつて自分と縁があった人たちであると考えようになるからである。

「生まれ変わり」があるとすれば、私たちは、自分のため人に優しくしなければならず、その結果私たちの毎日は優しさで包まれるようになる（袖振り合うも他生の縁）。

このような発想の延長に、血の原理のみによらない魂の原理に基づく「輪廻家族」という発想も出てくるだろう（注151）。

歴史上「生まれ変わり」の観念が出現したのは、伝統社会に政治的・経済的な変動が生じ、流動性の高い社会が出現した時期に当たる。生まれ変わりの思想は、地縁・血縁とは異なった原理で人々の間に共同性（つながりの感覚）を創出する（注152）。

日本でも昨今「生まれ変わり」を始めとするスピリチュアル文化が急速に広まったが、その背景には社会の多様性・流動性が高まり、社会構成員が断片化したことがある。

「生まれ変わり」に対する現在の日本人のイメージは、インドのような厭世的なものではない。むしろ積極的にこの世にかかわっていくための魂の進化論というおもむきが強いと思われる。

「生まれ変わり」をしたとされる勝五郎の地元では興味深い活動が行われている。

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団が、日野市郷土資料館の委託調査事業として2006年7月に発足したのである。当初32名だったメンバーは現在60名にまで拡大し、ご先祖様の「生まれ変わり譚」に集中して取り組んでいるが、血縁を超えた家族としての付

き合いが生まれているという（注153）。

平田が問おうとしたのは擬制として親族共同体を成り立たせている最も深い基盤でもあった。そう考えれば平田篤胤の思想は現在の閉塞状況をこそ突破できるヒントを与えてくれるものとして捉えることができる。

「生まれ変わり」という観念を再生させることにより、日本において「社会関係資本」を活性化させることができるのではないだろうか。

（注150）山本七平「日本資本主義の精神」ビジネス社、2006年、119頁

（注151）鎌田東二「老いと死のフォークロア」新曜社、1990年、550頁

（注152）竹倉史人前掲書、210～211頁

（注153）谷川ゆに前掲書、43頁

## 29. 母性資本主義のすすめ

26. で若干触れたが、最後に資本主義と社会における死の観念の関連性について述べてみたい。

フロイトは外傷性神経症患者の反復強迫（自我に不快をもたらすものが反復して体験されること）を「『生の欲動』以上に根源的で基本的で欲動的なものであり、人が自らの生まれる以前の状態に回帰しようとする欲動から発している」と解釈し、「死の欲動」と名付け、「生の欲動」に突き動かされて他者と関係しようとするとき、そこには「死の欲動」が同時に作用し、他者への攻撃的欲動となって発現することを発見した。

人は他者を愛するという関わりの中に既に他者を憎悪するという欲動が不可分の形で孕まれていることから、フロイトは「人は『生の欲動』を通して発動される『死の欲動』の攻撃的暴力を制圧するために文化を築いた」と主張した。

だが文化によって「死の欲動」の発現を押さえ込もうとする抵抗が成功することはない。文化に出来ることは「死の欲動」の暴発を延期させるだけであり、抑圧された「死の欲動」は蓄積し増幅され、やがて巨大なエネルギーとなって放出されるというのがフロイトの見立てである。

「資本主義システムにおける経済の発展や技術進歩は、『生の欲動』による『死の欲動』の迂回された回路であり、他者や自然への攻撃性が内包されている。（注154）」

このように指摘するのは齊藤日出治大阪産業大学名誉教授である。

現在の資本主義社会の下で人々は目新しいものを求める衝動がこの上なく高まり、自然などへの破壊力がますます増大しているが、次々と目新しいものを追求する行動は、死を逃れようとする衝動、すなわち、永遠の生命を求めようとする「反復強迫」であり、この「反復強迫」は「死を受容せずに死を拒絶する」社会のパラダイムによって引き起こされているというわけである。

だが多死社会の到来でこれまでのように死を隠蔽できなくなる。そうなれば資本主義も大きな変容を遂げる影響を可能性がある。

資本主義は昨今多くの批判を浴びているが、非常にしぶといシステムである。

資本主義は「資本」から価値を生み出すことを原動力にしているが、現在最も注目されているのは人的資本である。

IQがこの100年間で上がり続けている。特に「分類」と「抽象化」の2項目が目立

って伸びている（注155）。

現在日本ではSTEM（科学、技術、工学、数学）やビッグデータからの抽象化など理系からのアプローチが万能の時代になりつつある。

しかし、人間のあらゆる行動には先の読めない変化が付きものである。

理系的なアプローチに固執しているとした変化に対して鈍感となり、定性的な情報から意味をくみ取る生来の能力を衰えさせることにつながりかねない。

米国の最近の潮流は「STEMからSTEAMへ」である（注156）。追加はされたAはArts（人文科学）である。定量的な調査を行うに当たっても、社会的な対象を構成する枠組みなどについては人々の価値観や意識が作り上げる部分が大きく、価値の序列についての判断が必要であるとの認識が高まっており、このような哲学的な解釈作業を得意とするのは人文科学だからである（注157）。

私たちはともすればそうした人的資本の根源である「知能」を「物事を抽象化して捉える能力」などに限定しがちだが、認知科学者のハワード・ガードナーが30年以上前に唱えた（多重知能理論）ように、人間が潜在的に有する知能は非常に多岐にわたっている。

1983年に多重知能理論を提唱したガードナーは、知能を「人が問題解決を行う際に使う力」と定義した。具体的には①言語的知能②論理・数学的知能③空間的知能④身体・運動的知能⑤音楽的知能⑥対人的知能⑦内省的知能⑧博物的知能の8つに分類したのであるが、例えば「人間の感性の豊かさを表すとされる指数（EQ）」は、対人的知能と内省的知能（自分の考えや感情などを理解しコントロールする能力）がかかわるとされている（注158）。

超高齢社会に求められるのは「老齢期の人生の質」であるが、「世界はこうあるべきではないか」「人間はこうあるべきではないか」ということを考える構想力が衰えている。

「私は何のために生きているのか」という哲学的な問いについて考える脳の機能が委縮・退化してしまっているからである。

アルゴリズム全盛の今、我々の感性は麻痺しがちだ、目の前の課題を本気で読み解きたいのであれば、こんな時代だからこそ昔からある時代遅れと思えるようなやり方に回帰すべきではないだろうか（注159）。

「人間は何のために存在するのか」という問いかけに対する答えは「人は意味を作り出し、意味を解釈するために存在する」である。アルゴリズムにはさまざまな可能性があるが、関心を持つという行為はできない。まさしく関心を寄せ、気遣いをするために人は存在するのである。

過去100年間でもう一つ向上した知能は、「想像上の出来事（仮定）を真剣に受け止めることができる能力」である（注160）。

ガードナーは8つの知能に加えてさらに⑨霊的知能や⑩実存的知能という知能を追加した。これらは「人生の意義や死の意味などの実存的な条件について宇宙の深奥に自らを位置づけるなどの深遠な経験を通して自らを位置づける能力」のことである（注161）。

ドイツの哲学者ルドルフ・シュタイナーは「若い時は肉体的な感覚で世界を識る。中年になると心や知性で世界をつかむ。老年になると知性のもっと奥にある魂によって次なる世界から来る発信音を聴くことができるようになる」と主張している（注162）。

平田も「心の本質たる情の動きは一種の能動的エネルギーの発動である。情の高まりは

エネルギーの拡大であり、人間の生は要するにエネルギーとしての靈魂を大きく強く育て上げていく営みに他ならない。このエネルギーは一生の最後の瞬間において極大値に達する。エネルギーの高まりのままに人は神になる」と主張している（注163）が、かつて人は肉体が衰えた後は靈性を高めることが課題となっていた。

人々が「次なる世界」を信じなくなった昨今、高齢者はもはや尊敬の対象ではなく、せいぜい憐憫をかけるべき相手となってしまったが、このままで良いわけではない。

2050年に日本の労働者の4人に1人が医療・介護関係に従事する可能性がある日本において、求められる資質は「母性」である。

母性とは「困った人を助ける」という本能である。ほ乳類である人間は子育てにおいて授乳することができる母親の働きが大事なのは当然だが、母性は女性だけに備わったものではない。時代時代に応じた文化的・社会的特性の一つである。母性とは物事をすべて因果関係で説明するのではなく、あいまいなことはあいまいのまま受けとめるという知性のあり方である。

「切る」ことを主とする父性原理の下では、個人差を認めるので「競争」が大切だが、「包む」ことを主とする母性原理の下では、すべてが包まれたひとつの「場」を維持すること（一体感、共生感）が大切である（注164）ということができるだろう。

現在世界各地で「格差拡大」が大きな問題となっているが、「社会を成り立たせている生産様式が人々の能力や才能を十全に活用できていないのではないか」「人々の才能や能力は現在の経済システムのもとで無駄遣いされているのではないか」（注165）という問いかけが決定的に欠けているように思えてならない。

どんなシステムを用いたとしてもその中で生きていく人間が変わらなければそのシステムが豊かさをもたらすことはない。

21世紀の世界は「高齢化の世紀」になると言われており、資本主義の推進力（父性）に倫理的感情（母性）を注入することにより、誰もが「満足して死ぬる社会」を実現することができることを世界に対して発信していくことが、フロントランナーとしての日本の責務である。

（注154） 齊藤日出治「グローバル資本主義の精神分析」近畿大学日本文化研究所紀要、2017年、119～140頁

（注155） 吉田尚記他「どうすれば幸せになれるか科学的に考えてみた」KADOKAWA、2017年、180頁

（注156） 隠岐さや香「文系と理系はなぜ分かれたのか」講談社、2018年、4頁

（注157） 隠岐さや香前掲書、68頁

（注158） 有賀三夏「自分の強みを見つけよう」ヤマハミュージックメディア、2018年、127頁

（注159） クリスチャン・マスビアウ「センスメイキング」プレジデント社、2018年、7頁

（注160） 吉田尚記他前掲書、181頁

（注161） ハワード・ガードナー「M1：個性を生かす多重知能の理論」新曜社、2001年、74～84頁

（注162） 遠藤周作「死について考える」、194頁

(注163) 菅野覚明「神道の逆襲」、講談社、2001年、261～262頁

(注164) 広井良典「ケアを問いなおす」、39頁

(注165) マルクス・ガブリエル他前掲書、29頁

・おわりに

以上の考察を踏まえ、多死社会における成長産業の一つである「看取り」サービスの振興を行うための政策提言は以下の通りである。

①地方自治体が実施し始めている「エンディングプラン・サポート事業」のメニューの一つに「看取り」サービスを追加する（行政による情報提供のみ）ことを推奨する。

②「看取り」サービス事業と相乗効果が高い葬儀業界との連携を推進するとともに、「看取り士」資格を関連業界全体のものに格上げするための環境整備を行う。

③「看取り」サービスを始めとする終末期ケアの分野に最新の科学的知見を導入するための環境整備を行う。

④「看取り」サービスの価値を高めるとともに、社会全体にプラスの価値をもたらす（幸福感の向上や「社会関係資本」の活性化）ことが期待できる「生まれ変わり」の観念についての知見を深めるための研究プロジェクト（新死生学）を立ち上げる。